

る。そして、そのためにヴァジラヤーナが存在している。

わたしはいろいろなことを経験した。いろいろなことを知っている。そして、その法の一部を君たちに話している、説いている。しかしその法の中には、意図的にねじ曲げられて説いている法もある。例えば、ここまですてしてしまおうと現代の人は受け入れないだろうと、だからこれはここで止めておこうと。例えばその例が、地獄へ至る道であると。三悪趣へ至る道であると。

本来仏典にもあるように、わたしは経験から、この三悪趣に至る道というものの、これが最も厳しく、そして今のサマナの中でも、なかなか乗り越えられない道であることをよく知っている。しかし、それをあまりにも前面に出すならば、単なる「脅しの宗教」になってしまう。よってわたしは、今まであまりこの三悪趣について説かなかった。

あるいは、ニルヴァーナの状態についても、このニルヴァーナの状態を君たちに話すと、その低いニルヴァーナに安住し、そして結局、三つのグナの干渉により、また再生を繰り返さなければならないから、その内容についても曖昧に話していた。

しかし、わたしたちにはもうあまり時間はない。わたしにも、もうあまり時間はない。よって今日の、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラヤーナ、ヴァジラヤーナの法の内容と同じように、少しずつ、そしてそれを積み上げるかたちで君たちに提供したいと考えている。これはわたしの経験であって、それを単に、經典に照らし合わせて話しているにすぎない。これはわたしの見たものであって、それを単に經典に照らし合わせて話しているにすぎない。

第十四話（一九九〇年三月十一日 富士山総本部）

今、日本においてオウム真理教は徹底的なサンドバックの状態になっている。なぜ、オウム真理教がそのサンドバックの対象にならなければならないのか。これに対しては、いろんな考え方があつた。わたしはどう考えているかというと、やはり『ヨハネの黙示録』に出てくる、そして『ノストラダムスの大予言』に出てくる教団であるから当然だろうと。

君たちも、もう知っているかもしれないが、ワシントンに、一九九〇年、今年だね、ものすごい巨額な費用をかけて、ユダヤ人がナチス・ドイツに虐殺された、そのための記念館を造るということだ。——まあ、実際に九〇年にできるという話だけれどもね——という話の内容を読んだことがある。

いよいよユダヤ人——フリーメイソンが登場し出したなど、表面に出てきたなど、これがわたしの印象です。そして、オウム真理教に対する彼らのバッシングの狙いは、オウム真理教を崩壊させること、あるいはオウム真理教を従わせることにあると。しかし、本来真理というものは、ただか人間が、あるいはただか組織が、その真理をねじ曲げたとしても、そのカルマの法則に対して何ら影響することのできないというのが実態である。君たちも知っているとおり、戦前の大本教、そして戦後しばらくの生長の家、大本教は最後まで今の国体とぶつかり合ったがために、大きくなることはできなかった。生長の家は三十年代前半、あるいは二十年代の後半ともいわれているけれども、昭和の二十年代の後半、三十年代の前半に妥協したために大教団にのし上がった。そして、彼らの得たものは、金であり、組織の大きさであり、そしてまあ、誉れ、名誉であると。

わたしは、いっさいのものを必要としない。いっさいのものとは何か。それは名誉である。それは金である。それは地位であると。わたしが今ここに存在しているのは、すべての魂がいつの日か必ずマハー・ニルヴァーナに入るためである。そして、それをなさせること、これがわたしの使命だと考えています。

オウム真理教にとって、九〇年代の日本で生き抜くことは至難の技でしょう。しかし、この至難の技を乗り越えられるという予言の内容がある以上、乗り越えなければならない。そして、新しい光音天^{うきんてん}へ向かう地球づくり

をしなければならぬ。

まだ君たちは、たった四百人の団体で何ができるんだと考えているかもしれませんが。しかし、わたしは皆さんに、最終解脱者であると自称している。そして、これは言い方を換えれば、君たちが考えている、一般の頭脳労働とわたしの思索とは、大きなズレがあるんだということを理解しなければならぬ。今、わたしはじつと待っている。何を待っているのか。それは、この日本を動かしている人たちが、大悪業のどのような房をどんなに付けることである。そして、それは必ず落とし、ぶどう酒にし、返さなければならぬ。

新しいわたしの内弟子は、このような話を聞いたとしても、ピンとこないかもしれない。それについては、自分自身がいかにかに教学不足かということを考えればよろしい。まあ、その全体的な話は別として、今日は、一つ瞑想について、禪定について、君たちに話をしたいと思います。

禪定というものは、海底に潜る潜水のようなものであると考えたらよろしい。これはどういうことかという、まず第一には、深く潜ること、これは大変難しい。そして、第二には、深く潜るためには、時間がかかるということである。例えば、ここに潜水夫がいて、その潜水夫が一時間で潜れる分、海底に潜ったとする。そして、その人は上がってきた。一回目、その人は一時間で潜れる海底の景色を眺めてきた。この人が同じように、一時間の瞑想を二回、三回、つまり、一時間の潜りを、二回、三回、あるいは四回と行なったとして、確かに一時間で潜れる範囲内、一時間で潜れる世界については熟知するようになるだろう。これはどうだね、君たち。わかりますか、わたしの言っていることは。

しかし、彼は一時間以降、つまり二時間、あるいは三時間、あるいは四時間深く潜ることは、当然経験していかないわけだから、その世界について言及することはできない。これはどうだ。瞑想の時間がなぜ長くなければならないかというのは、そこに起因している。つまり、深く潜るためには、それだけ時間が必要なんだということだ。そして、その深く潜ることによって、自分自身の内側、本当の自分自身を見いだすことができる。

君たちの真我と、それから心は、嵐の海とその海底に沈んでいるダイヤモンドのようなものであると表現することが出来る。当然、渦巻いた海だから、ダイヤモンドがどこにあるのか見いだすことはできない。そして

例えば、到達するのに十二時間かかるとして、十一時間まで何度潜ったとしても、そのダイヤモンドに到達することはできない。これは、わかるかな。もちろん、十一時間までの距離、十二分の十一までの距離については、熟知できよう、何度も何度も行なっていたら。しかし、それより深い自己というものに到達することはできないということだ。わかりますか。

ということは、ロングの瞑想、深い瞑想、これを行なわなければならない意義というものが理解できよう。そして、わたしが立位礼拝を連続で行なわせる、あるいはヴァジラヤーナのザンゲを連続で行なわせる理由は、そこにあるということだ。早く自己に到達するためには、確かに濁り水がいろいろあるかもしれないが、その濁り水を、集中して、濁り水を何度も何度も経験し、ここから先はちょっと危険だぞと、ここから先は雑念状態になるぞと、あるいはここから先はしばらくは透明な状態があると、しかしこの透明な状態は、まだ本質ではないと、この後、もう一回濁りがきて、そして最終地点に到達するんだと。このような形で瞑想を進めることができるならば、必ずや真我と真我の本質というものを得ることができるだろう。だから、わたしは君たちに長い集中をしないとい話をするんだ。どんなにつらくても、どんなに痛くても、長い集中をしないとい。そして、長い集中を行なうことにより、結果が出てくるんだということだ。

では次に、姿勢について話をしたいと思う。なぜ蓮華座を組み、腰を入れ、一本の棒のように、大地を頭で支えるように座らせるのか。これは、君たちも経験したことがあると思うが、ムーラダーラ・チャクラからサハスラーラに向けて、エネルギーが上昇する。そして、そのムーラダーラから——集中して——ムーラダーラから、サハスラーラに向けてエネルギーが集中する際に、例えば体が曲がっていると、そこでエネルギーが引つかかる。すると、その引つかかった部分の経験を豊富にしなければならぬ。わたしたちに本質的に必要なもの、それはサハスラーラの経験である。だから、その途中の経験は、なくてもいいわけだね。早く、その状態にエネルギーを集中させること、これがポイントであるわけだ。よって、蓮華座を組み、腰を入れ、エネルギーが速やかに上昇できるように行なう。

では、なぜ、次に蓮華座が必要なのか。これは、アパーナ気の制御であると。そして、地獄に至る、下に

向かうナーディーの制御であるということが出来る。座法を組むと痛い。血流の流れが阻害される。それと同時に、プラーナも制御される。ということは、下に行く気、下に行くエネルギーが少なくなり、そして上に行くエネルギーが多くなるということがいえる。そして、これをきちんと行なうことにより、君たちが目的としている解脱、最終の解脱までのスピードを速めるということだ。

つまり、経験にとって最も必要なもの、それはサハスラーの経験である。この二つについて押さえておかないと、なかなか瞑想が深くならない。例えば、腰を曲げ、例えば座法を組まないで——もちろん解脱に対する修行でなければ、それもいいと思います。しかし、解脱に対する修行、自己を完成させていくための修行である限り、厳しい座法、腰を入れる、そしてサハスラーに向けてエネルギーを上げる、集中力を持続させ、できるだけ長い時間瞑想し続けて、五日、あるいは一週間、連続で瞑想ができれば、最高だろうね。そして君たちは、大変徳の高い人たちだから、その期間が与えられている。わたしはうらやましいと思います。

はい、では、もう一度今日のね、特に後半の復習、これをしましょう。つまり、瞑想というものは、潜水のようなものである。そして、短い時間の瞑想をいくら何度もやったとしても、それは心の本質には到達しない。ただ、心の浅い部分については、熟知するようになる。深い瞑想を何度も何度もやることにより、深く潜れるようになり、そして自己の本質がわかるようになる。そして、最も長い、真我に到達するだけの深い瞑想を行なうと、自己の本質というものを理解できるようになる。そして、これが、瞑想の目的であると。

そして、もう一つは、座法の問題。厳しい座法を組み、下にエネルギーが降りないようにし、上にエネルギーを上げるようにし、背筋をピンと立て、エネルギーがサハスラーまで一気に上昇するように座る。これは、最も合理的な座法であるということが出来る。君たちは、こういう経験をすることがあるはずだ。それは、たくさんものを食べると性欲が強くなると。食事が少ないと性欲が弱ると。あるいは、性エネルギーを漏らし続けると、漏らしたくなると。これは、同じ理論だ。つまり、たくさんものを食べると、サマーナ気、アパーナ気と、どんどん下の気を使うようになる。性エネルギーを漏らすと、同じように下の気を使うようになる。だから、その気のコントロールができないと、エネルギーはどんどん下がるようになる。

そして、早く、君たちが自己の完成をすることを祈って、今日の講話の終了としたい。

今日は、少し強烈な話をしたいと思います。

なぜわたしは、この強烈な話を今日行なおうとしているのかというと、これを行なうことによって、あなた方の修行の意味というものを、これをもう一度確認できるという意味があるからです。

まあ、修行にはいろいろな段階があります。例えば、三悪趣に生まれたくないためと。例えば、解脱したいためと。例えば、天界へ行つて、幸福な生活を送りたいためと。あるいは、多くの人々のために、多くの人々が本当の意味で自由で幸福な生活を送れるようになるためにといったような、いろいろな目的があつて、ここに集まっている人たちは修行をしているはずですよ。

そして、例えばその最終地点にある、「わたしは多くの人々のために修行をしているんだ」という人は、今日のわたしの講話は単に知識として受け入れればよろしい。しかし、もし修行の意義というものがわからず修行している人は、今日わたしの話す話の内容を聞いて、十分にその真偽というものを検討してください。

イエス・キリストが、みんなのカルマをしょつて十字架にかけられたという話があります。まあわたしは、イエス・キリストが十字架をしょつて殺されたというのは、あまり信じていない。なぜならば、その後の世界史の展開を見ると、精神性においては、よりいっそう悲惨なものになっているからである。

しかし、カルマをしようという行為そのものは成立するといえるでしょう。しかもそれは、第一天界や第二天界の生命体、つまり四天王衆天や、あるいは三十三天、あるいは天界の王といわれているインドラでも、そのカルマをしようことはできないんだということを、ここにまずつけ加えておかねばならない。そして、人間界のカルマをしようことのできるもの、それは夜摩天からである。

では、なぜそういえるのかといったら、夜摩天はわたしたちを罰します。そして、ある者は地獄へ、ある者は餓鬼へと落とされると。でも、落とす裁きを行なう者、これは当然その生き物たちのカルマをしょわなければならぬ。あるいは、それに従事する獄卒たちは、当然そのカルマを受けなければならぬ。

君たちも知つてのとおり、マハー・ケイマ正大師はたくさんシャクティパーバットを行ない、そしてたくさんカルマをしょつた。そして乱れた。例えばこれは、マハー・マーヤ正悟師、あるいはマイトレーヤ正悟師も、シークレット・ヨーガに集中し、相手のザンゲを受けるだけで、同じようにカルマをしよう。そして、今回マハー・ケイマ正大師、あるいはマハー・マーヤ正悟師、あるいはカーリー——こういう子たち、つまりわたしの身近にいる人たちから、わたしはステージを引き上げようと考え、いろいろと修行させている。その修行の一つに「ヴァジラヤーナのザンゲ」がある。そして、わたしはあなた方と違い、容赦なく殴りつける。そして、わたしがカーリーを叩いた後の経験をまず話すことにしましょう。

カーリーに対してヴァジラヤーナのザンゲを十四時間やらせたことがある。このときに、わたしは二時間指導をした。そして、そのうちの一時間は、ほとんど竹刀で力一杯お尻を殴りつけるという作業を繰り返した。彼女はほとんど蓮華座を組むこともできず、そして詞章を読むこともできなかった。そして、泣き続けた。

ところが、三回目からは——三回目から四時間に落として、自分でやらせたわけだけれどもね——一人で蓮華座を組み、四時間集中し続け、ヴァジラヤーナのザンゲを続けた。そして、わたしはどうなったかというと、叩いた後、そのまま内熱が出——内熱というのは、ナーディーに詰まりが起きて生ずるものだが——その熱によつて一日苦しんだ。しかし、まあ今まだ少し残つてはいるけれども、マントラ瞑想、あるいは思索をすることによつて、抜け出すことができた。ということは、カーリーのカルマがわたしに移ったんだということだ。

そして、そのカーリーの乱れをなしていたエネルギーというのは、大師のエネルギーであつた。まあその内容についてここで深く触れられないのは残念だけれども、そのエネルギーによつてカーリーの下位のチャクラが開き、そして下位の世界とつながっていたがために、カーリーに瞑想ができない状態、そして完全に乱れた状態が生じていた。

今、私はオウム真理教に対して行なわれている、呪詛を含めたいろいろなエネルギーを一つ一つ切っています。そしてそのためには、まずステージの高いといわれている人——マハー・ケイマ正大師、マハー・マーヤ正悟師、マイトレーヤ正悟師、あるいは家族あたりから、集中的にエネルギーを変えていくこと、心の状態を

変化させていくことが先決だと考え、それにかかりきりになっている。

そして今、わたしがこの比喩をあなた方に提示した理由というものは、なぜわたしだけが——まあその他に叩いた人たちもいるわけけれどもね——カーリーを担当して、なぜわたしだけがその日にカルマが返ってきたかと。それは、わたしのステージが低いから返ってきたのだろうか。それとも、わたしの苦の総量が限界点に達しているから返ってきたのだろうか。それとも、わたしの器が小さいから返ってきたのだろうか。これは、そうではないといえる。

つまり、凡夫であればあるほど、そのカルマの返りは遅いということがいえると。なぜならば、あなた方も知つてのとおり、人間を構成する三つの要素、ラジャス・タマス・サットヴァの中で、無智を構成しているもの、これはタマスである。そして、これは現象を遅らせる働きがある。それは知っているね。どうですか。そして、修行者になり、特にザンゲの瞑想その他を行なうことにより、現象が早く返り、そしてそのカルマの返る比というものは拡大されず、一対一、あるいは一対〇・一といったようなかたちで返るようになる。それもあるね。早く返れば返るほど、そのカルマというものは早く清算される。これはわかるね。そして、その状態を自分の中で体得すると、カルマの実体というものが、そして何をなせば救済することができ、何をなさなければ救済できないのかという実感を持つことができるようになります。

そして、そのわたしの経験、それから瞑想体験から、あなた方に地獄というものがどのような形で形成されているのかについて、これから少し話をしたいと思います。

まず、仏典ではどのような記述があるだろうかと考えた場合、あなた方も知つてのとおり、三叉の矛で、両足そして肛門から突き刺され、火であぶられる。あるいは、針の上を歩かされる。あるいは、熱い鉄板の上を歩かされる。あるいは、鍋の中にものごく沸騰したお湯が入っていて、その中で煮られる。あるいは、切り裂かれるといったような記述があるのを知っているだろう。どうだ、これは。

そして、この地獄そのものは、二千五百年前の地獄であるというふうに理解しなさい。それは、こういう理由からだ。この欲六界を構成しているもののデータというものは、どうだ、コーザルの世界に存在していると

いえないか。ということは、今の世界を投影するならば、そしてわたしたちのなしたことを検討するならば、地獄というものは、形が変わって当然だね。どうだ。二千五百年前に、果たして電子レンジがあっただろうか。あるいは、二千五百年前に殺虫剤があっただろうか。よく考えてみよう。

まず二千五百年前の調理法、例えばこれは、貝類などは今と同じように生きたまま放り込み、煮るだろう。どうだ。ということは、これと釜ゆでの刑というものは、全く矛盾しない因と果ではないか。どうだそれは。あるいは、生きたまま串刺しにして焼くという作業、これを行なうだろう。こういう食べ方もあるよね、どうだ。あるいは、生きたままの魚を活け作りと称して切り裂き、そしてそれを食べる。どうだ、これは。あるいは、生きたままのエビの皮をむき、そして——あれは少し酒につけるのかな——それを口に放り込み、そのピンピンとしたエビの動きを舌で楽しみ、食べる。どうだ、これは。あるいは、生きたままのものを鉄板で焼く。どうだこれは。

ここらへんは、今も二千五百年前もおかしくないね。どうだ。そして、当然カルマは一に對して一返るわけだから、その地獄の表現というものが、同じようなかたちで表現されたとしてもおかしくはないよね。だとするならば、この地獄の記述というものは正しいと考えていいんじゃないか。どうだ。

では、現代の地獄はどうだろうか。

例えば、生き物に対して爆竹を突っ込み、火を付け、爆破させる。こういう殺生をした人もいる。まあこの中にもいるだろう。どうだ。こういう人たちの行く地獄はどういう地獄だ。獄卒が肛門にダイナマイトを打ち込み、火を付け、爆破させる。

例えば、墮胎はどうだ。墮胎は子宮に棒を突っ込み、胎児をぐじゃぐじゃにして引き出す。これはちょうど、地獄も科学が進んでいるだろうから、きつとミキサーの中に放り込まれ、ぐじゃぐじゃにされ、殺されると。あるいは、まだ時代遅れであるならば、すり鉢かもしれない。どうだ。

例えば、「シュッとひと吹きキンチョール」と。殺虫剤によって虫を殺す。その殺虫剤によって死ぬときの虫の苦しみを考えたならば、どうだ。同じように、獄卒にシュッとひと吹きされて、もがきながら死んでいく。

それを何度も繰り返さなくてはならない。どうだ。

そして、君たちは自己の過去を振り返りなさい。自己の過去において、そういうカルマをなしたことがあるのかどうかを検討しなさい。しかもそれは、心の単純なる喜びとして、弱いものを虐待する心の働きとして経験したのだということを考えなければならぬ。

そして、今の世の中は、よりいっそう物質化し、生と死というものの区別をはっきりとつけ、自分たちとはいつさい関係のないようなかたちで社会を運営している。その典型的な例が、あなた方も知つてのとおり、日本人のほとんどの人が病院で死ぬということだ。そして、断末魔の苦しみというものを見ることができないということだ。

私は地獄を見たことがある。地獄を経験したことがある。そして、実際にこの世において、弟子たちを心を込めて叩くことによつて、そのカルマが体に返ってくる。

では、麻原の言っているとおりの、行為のカルマというものの、この行為のカルマというものが返ってくるんだつたら、ヴァジラヤーナの考え方と矛盾するではないかと、叩かない方がいいではないかと考える人もいるかもしれない。そこは逆に心の問題である。私は思念をしながら叩いている。修行しろよと。そして魂を成熟させるよと。早く今の状態を乗り越えろよと。そして、叩く。当然、わたしの体にそのカルマは返ってくる。しかし、それによつて相手は確実に、先程も言つたとおりの、たったの二日間、ほとんど座れなかつたカーリーが四時間連続で蓮華座を組み——まあ組み替え、組み替えではあるけれども——組み続け、詞章を休むことなく唱え続けられるようになった。そしてそれだけではなく、オウム真理教にかけられている呪詛、これが少しずつ弱まってきた。そしてそれだけではなく、わたし自体が、どんどんどんどん瞑想しやすくなつてきている。これは何を意味しているかと。肉体は確かにカルマを受けた。しかし、心はそれによつて、よりいっそう目的を完遂できるようになつてきているということである。

しかし、凡夫は自己のことしか考えることができない。目先のことしか考えることができない。よつて、凡夫である以上、例えば愛を持つて罰することもできないし、叩くこともできないし、殺すこともできない。よつ

て地獄に落ち、その地獄の苦しみというものは、何ら彼らの精神的成長にとってプラスになるものではないだろう。それは、第三天界の夜摩天も、同じようにただ裁くことしか考えていないからである。

わたしがここであなたの方に今何を言いたいか。最低三悪趣にだけは生まれないうにしなければならない。そして、そのために修行があるんだということを理解しなければならない。できたら、本当の意味での解脱をしなければならぬ。なぜならば、いかに高い世界に生まれ変わったとしても、その高い世界において真理に巡り合える確率が果たして何パーセントあるか、それは疑問だからである。どんなに功德を積んでいたとしても、それは、例えば百億円あると一千億円あると、そのお金に利息が付かず、日々使つていけば、必ずいつかはなくなつてしまふのと同じである。そして、隠されている三悪趣への道に必ず落ちることになる。

そしてわたしは、よく修行から現世に帰ることを「落ちる」という言葉を使っている。そして、『南伝大蔵経』においても、仏陀釈迦牟尼は、「下向」——下へ向かう、つまり「落ちる」と同じ意味の言葉を使っているということだ。そしてここにおいても、同じように親族が反対し、現世へ引き戻そうとする。そして、あらゆることを行なわれた。今の時代は、そんな状態の比ではない。そして、わたしはそれについて、大変いいことだと考えている。なぜならば、わたしに最後の一つの選択しか与えてくれなくなつたからだ。

タントラ・ヴァジラヤーナにおいて、四つの選択肢がある。第一は、相手を幸福にする、そのための修行法を伝授することだ。第二は、相手に繁栄を与える、そのための修行法を伝授することだ。そして、第三と第四をここで話せないことは残念だが、四つの選択肢があるということだ。

君たちは、少なくとも三悪趣に落ちないように。そして、解脱をし、この欲界の苦悩から解放され、そして、本当の意味での自由・幸福を味わつていただきたいと考えています。

それからもう一つ、なぜ蓮華座を組みなければならないのか、あるいは、なぜ達人座を組みなければならないのかについて、一つここで注意しておきたい。それは、わたしたちの心の働くと、それからプラーナとは、切つても切り離せない関係があります。そして、この切つても切り離せない関係、それから逆に、心を下に下げないために座法があるのだということを理解すれば、蓮華座を深く組む必要性というものを理解できるよう

になるだろう。例えば、Uがいつまで経っても動物から抜け出せないのは、蓮華座が組めないからだということともいえないことはない。なぜならば、深く座法を組むことにより、その血液の流れ、そしてプラーナがストツプします。ということは、アパーナ気が動かない状態が出てくると。ということは、上の気を働かせるようになる。それによって、意識状態は高みにとどまると。あるいは達人座の場合、特別な座り方があるわけだけれど、その座り方によってプラーナが完全に固定されてしまい、アパーナ気が働かなくなる。それによって、同じように、プラーナが下向しないというような状態になる。よって、座法というものは最も大切なんだということを、ここでもう一度認識しなければならない。いいね。

今日、わたしが地獄の話をしたのは、この現世においても、君たちの意識状態が鮮明になれば、カルマの法則というものが理解できるということを話したかったからである。そして、地獄というものは、きちんと存在しているんだということを話したかったからである。この現象界は、心の働きも含めて、物理的な法則で成り立っていると理解してほしい。

第十六話 (一九九〇年三月二十四日 富士山総本部)

今日は、おそらく初心者には何が何だかさっぱりわからない、ちょっと難しい話をしたいと思います。というのは、今日の話を理解できないと、上級者は何のために修行をするのか、そして、なぜこういういろんな修行法があるのかということについて理解できないだろうから、それについて話をしなければならぬと考えています。

まず、この宇宙のサイクルについて話すならば、虚空の時期、創造の時期、そして維持の時期、破壊の時期と、四つの時期に分けることができます。そして、この虚空の時期は、魂が完全に二分化される時代。最もハードな修行を終えた魂は、光音天——あるいはアフラの世界と言ってもいいけれど——へ入ります。これは純粹アストラルだと考えてください。そして、このアフラの世界から欲界に転生する。ここで一つポイントになるのは、このとき地獄の住人、アストラル世界の最も低位にある地獄の住人たちも転生を始めます。そして、なぜそれが起きるのかという話をしなければならぬ。

それは、創造の時期をまず考えましょう。例えば、光音天から降りた魂は、ブラフマンの世界、そして天界の経験を終えて、人間の世界へと降りていく。一方、地獄の住人は、餓鬼の世界、動物の世界と形成し、そして人間の世界へと上がっていく。そして、普通だったなら、例えば人間から地獄へ落ちる、あるいは餓鬼から動物へ上がる、あるいは餓鬼から天界へ上がるというプロセスがあるわけけれども、この時期に至る場合それがほとんど行なわれません。いや、全く行なわれぬと言った方がいいでしょう。それは、今日これから説明する内容を、あなた方が理解するならば、よくわかることだ。

まず、宇宙の創造過程について考えてみましょう。徳の高い魂は、光音天から徳をどんどん擦り減らし、梵天、そして戯忘天、あるいは闘争の天界、あるいは人間の世界へと降りてくる。そして、この魂の経験は上位の経験をしています。これはわかりますか。というのは、例えば人間の世界へこの魂が降りたとして、その前生の経験というものは、闘争の世界、阿修羅の経験であったり、あるいは戯忘天の世界の経験であったり、あ

るいはブラフマンの世界の経験であったり、あるいは光音天界の世界の経験であったりします。ということは、この魂は少なくとも上昇のデータ、高い世界のデータしか身につけていません。

そして、それとちょうど同じ時期、地獄から餓鬼、動物と経験し、そして人間の世界へと上がってきた魂がいます。この魂は、下へ落ちる、下のデータしか持っていない。

そして上位の人たちは、神秘的な力を持ち、下位の人たちはその力がない。よって、ここでカースト制度、身分的な分化が起きます。これが創造の時期における欲六界の構成だと考えてください。

そして、この欲六界の構成期には、人間界まで落ちた魂を、また上の世界へ、例えば光音天へ、あるいはそのを超えたマハー・ニルヴァーナの世界へと導く、そういう法を携えた救済者が現われます。そして、このときの救世主は、徳の高い魂以外救済しない。そして、どういう法を説くかというと、自浄の法を説く、自分自身を清めていく法を説きます。そして、これを後期大乘の人たちは馬鹿にし、ヒナヤーナと説いたと。

しかし、実際にはこのヒナヤーナの中には、単純に個人の修行という意味だけではなく、自分自身が高い世界へ上がっていくためのデータというものは、もともと高い世界の経験をしている魂しか入ることができません。ニルヴァーナに入れる魂というのは、もともと高い世界の経験をしている魂しか入ることができません。

つまり、創造の時期におけるヒナヤーナの修行と、それから維持の時期におけるヒナヤーナの修行と、それから破壊の時期におけるヒナヤーナの修行は、同じ修行をしていても魂の質によって結果が違うのだということとをここで理解しなければなりません。

そして、この下から上がってきた魂と、上から落ちてきた魂との交わり、これがどんどん起きる。そして、この中間のいろいろな階層ができてきて、維持の段階に入る。なぜ維持の段階に入れるのかというと、これは今の説明でもわかるとおり、いろいろなパートが誕生するからです。そして維持の段階で降りてくる魂は、救済者は、マハーヤーナ、大乘を説きます。そして、このときに与えるものは何かというと、繁栄・幸福というものを与えます。

なぜ幸福というものを与えるかというと、これは維持中心の世界だからです。ということは、創造のときに

は自浄によって、小乗によって、清浄な修行によってその魂に何を与えるかというと、幸福・ピースを与えます。そして維持の時代のマハーヤーナの教えは、安定・繁栄、これを与えます。

そしてこの時期は、最も宇宙秩序が安定している時代です。ですから、この時代には、生・死というものの安定においては、生に対して安定、死はあまり関係ないという意識が人の魂に根付きます。そしてこの安定において、どういう意識状態に魂になるのかというと、ほとんど物質的なものを求めるようになります。そしてそれを与える、これが繁栄、そしてその法こそが大乘の法だと言わなければなりません。

そして、次に物質的に安定してくると、人の魂は、欲望、この欲望をどんどん満たそうとします。そして、第三期に現われる救世主は、その欲望を満たし得る救世主でなければなりません。そして、その欲望を満たしながら、高い世界へ上げる救世主でなければなりません。そして、それだけではなく、その欲望から神秘的な力というものを与える救世主でなければなりません。

ここで登場するのがパワーです。力です。そして、ここで登場する修行法、これはタントラヤーナの修行法ということになる。そしてこれは、維持の終わりから破壊の初めの時期に登場する救済者、そしてこの時期には、必ずタントラヤーナの修行が中心になります。そして、人間の魂がもつとつとけがれ、そして第四期、破壊の直前になると、タントラヤーナの修行においても救済できない、そういう魂の世界が人間界に形成されます。

ここで登場してくるのが、ヴァジラヤーナ、つまりフォース、力を使って、武力を使つての破壊です。なぜならば、この欲六界の、例えば地獄の世界、餓鬼の世界、動物の世界、人間の世界、阿修羅の世界、そして戯楽の世界、これらの世界は一つ一つ役割があり、その心の働きによって形成されなければならないからである。ということは、例えば人間の世界が動物化したり、あるいは動物の世界が餓鬼化したりすると、その世界の形成バランスというものが崩れます。そして、その世界の形成をコントロールしている神々がいて、その神々がその秩序を元に戻そうとします。

そして、こういう積み上げにより小乗、大乘、タントラ乗、そしてヴァジラ乗、ヴァジラヤーナといった四

つの修行形態が存在し、これが、この四期と適合しているのだということを理解しなければならない。そして、この四期の教えはそれぞれ違います。では、なぜこの四期の教えが違うのだろうか。

それは経験による違いからきている。つまり魂というものは、積まなくてもいい経験を多く積むことによりけられ、その本質というものを見失い、そして正しくない方向に転生する。そして、この転生によって魂は苦しむ。そして、その苦しんだ背景すらわからないような状態になる。

例えば、ここに一回異性と交わった者がいたとしよう。あるいは、五十回異性と交わった者がいたとしよう。この二つの経験は同じだろうかと考えたら、どうだろうか。当然、違うということが出来るだろう。じゃあ、例えばここに人がいて、一回フランス料理を食べたことがあるとしよう。あるいは、五十回フランス料理を食べたことがあるとしよう。これは同じだろうか、違うだろうか。一回の経験を消す修行法と五十回の経験を消す修行法は、同じであろうか、違うだろうか。

そして創造の時期に、例えば人間界に降りた魂、この魂が自浄の修行、小乗の修行、清浄なる修行を聞き、それを実践し、そしてまたブラフマン、あるいはマハー・ニルヴァーナへ、あるいはニルヴァーナへと帰る。この魂と、維持の時期、この人間の世界まで落ち、それからものすごい長い間輪廻転生を繰り返して、この欲望の経験をしている魂、あるいは創造の時期、地獄から人間の世界まで上がり、そして徳を積んだり悪業を積んだりしながら、この六道を流転している魂、これらの魂の質というものは、同じだろうか違うだろうかということを考えなければなりません。

もちろん、ここで考えなければならないことは、創造の時期の修行法によってこの欲望をぶち抜いて上がっていく魂、維持の時期の修行法によってこの欲望をぶち抜いて上がっていく魂、破壊の時期にこの欲望をぶち抜いて上がっていく魂、これは後半になればなるほど、どんどん上がりづらくなる。ということは、後半になればなるほど、どんどんシビアな、ハードな修行法が要求されることになります。

ところが、私たちは一つの観念にとらわれがちである。二千五百年前、この方法でよかったわけだから、今もこの方法でいい。二千五百年前、この方法が真理だったわけだから、今もこの方法が真理である。確かに、

二千五百年前の真理は真理でしょう。しかし、その真理が果たして今の時代に、私たちの魂をブラフマンの世界へジャンプさせるだけの力を持ち得るかどうかということを考えなければなりません。

そして、オウム真理教にはこの四乗が説かれています。一つは、自浄、清浄なる修行法である。第二は、人を繁栄に導く修行法である。第三は、マントラを唱え、そして欲望を昇華させる修行法である。そして第四は、いつさいの煩惱がたとえそこに生じたとしても、それに全く動かないような心を完成させるための修行法である。そして、魂の流転において、今、この時代を生き抜き、そして解脱をするためには、この四乗が必要なんだということを皆さんは理解しなければなりません。

この四乗の考え方、あるいは宇宙の虚空から創造・維持・破壊といったこのプロセスの考え方、これを皆さんがきちんと理解するならば、何が真理で何が真理でないか、あるいは今の世の中がどのような方向に進んでいるのか、あるいは自分自身は何をなさなければならないのか、よく理解できるようになると思います。

では最後に、なぜ人間がこの欲望の世界へ落ちるのかという話をして終わりにしましょう。

人間の身体には六つのエネルギーをロスする放出口があります。それは、君たちもよく知っている、ムーラダーラ・チャクラ、スヴァディスターナ・チャクラ、マニプーラ・チャクラ、アナハタ・チャクラ、ヴィシュッダ・チャクラ、アージュニア・チャクラです。この六つは、漏、漏らす働きをしています。つまり、このチャクラを使うということは、それは言い方を換えれば、エネルギーを漏らすというふうに考えて結構です。

例えば、心が怒りに支配されているとき、第一のチャクラを使います。例えば、心が貪りに支配されているとき、第二のチャクラを使います。例えば、心が無智に支配されているとき、第三のチャクラを使います。例えば、心が執着に支配されているとき、第四のチャクラを使います。例えば、心が闘争に支配されているとき、第五のチャクラを使います。例えば、心が自己満足の世界に支配されているとき、第六のチャクラを使います。あるいは、嗅覚にとらわれ匂いを追っかけているとき、第一のチャクラを使います。あるいは、味に執着しているとき、味の貪りに執着をしているとき、第二のチャクラを使います。あるいは、美しいものを追っかけているとき、視覚的なものにとらわれ追っかけているとき、第三のチャクラを使います。あるいは、身体に触

覚的感覚に支配されているとき、第四のチャクラを使います。あるいは美しい音に支配されているとき、第五のチャクラを使います。あるいは、心に浮いてくるいろいろなイメージ、こういうものに支配されているとき、第六のチャクラを使います。

そして、このチャクラを使うということは、それぞれエネルギーを漏らしていると。そして、このエネルギーを漏らしているということは、ジャンプする力をなくしていると。そして、ジャンプする力をなくしているということは、低い世界へ落ちるんだというふうに考えてください。

つまり、この六つのチャクラを完全に使いこなせるようになり、そしてそれに対していつさい頓着をしなくなった状態、その意識状態から離れた状態、これが解脱です。

そしてそのとき、第七番目の門、サハスラーラの門が開き、そこから抜け出すことになるでしょう。そして、仏教ではこれを漏尽通、つまり漏らすことを尽くす状態、いつさい漏れのない状態、この状態を指します。そして、あなた方がこの六つのチャクラを完全にコントロールし、そして第七門を開き、自在に使えるようになったとき、今あなた方が抱えている苦悩から完全に解放されることになるでしょう。はい、それでは今日の講話はこれで終わります。

第十七話 (一九九〇年三月三十一日 富士山総本部)

今日の講話は少し難しいかもしれないけれども、まあ君たちは今一生懸命教学をやっているわけだから、しっかりと理解するようにしなさい。

それは、よく質問がある、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナ、これとラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、マハムドラーについてである。チベット仏教では、このラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、マハムドラーのプロセスを、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラヤーナに当てはめているという話を私はよくするわけけれども、この詳しい話を少ししなければいけない。そしてそれと同時に、もう一つは、師匠の三つのステージ、グルの三つのステージというものについても、今日は話したいと思っています。

まず、ラージャ・ヨーガの原則は否定である。そして、ヒナヤーナの原則も否定である。これはよくわかるはずだ。ということは、ヒナヤーナの中心はラージャ・ヨーガといえないことはない。そして、マハーヤーナの原則は否定も肯定もしないことである。クンダリニー・ヨーガの原則も否定も肯定もしないことである。ということは、クンダリニー・ヨーガの要素を持っている人は、大乘の要素、これを持っているといえないことはない。同じように、マハムドラーの修行というものは、これは、苦というものを創造する、あるいは煩悩というものを肯定する。そして、それを課題として修行を進めていく。タントラ・ヴァジラヤーナのタントラの修行、このタントラの修行は、人間の持っている煩悩、楽というものを中心に修行を進めていく。ヴァジラヤーナの本質は、逆に苦というものを見つめ、修行を進めていく。

ということは、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、マハムドラーの中に、修行のヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナの基本的修行体系というものは内在されていると考えて間違いない。では、なぜラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、あるいはマハムドラーが小乗の部類に入るのかと言うならば、この三つの修行には四つの無量心というものが欠けているからである。つまり何を言いたいかと

いうと、このラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、マハムドラーという修行、これらの修行法は、すなわちヒナヤナ、マハーヤナ、タントラ・ヴァジラヤナに通じるわけだけれども、そこに四つの無量心、つまり大乘的背景というものの、あるいは救済者としての意識というものが根付いているかどうかということが、ここにおけるポイントとなってくる。

もう少し詳しく説明しよう。ここにラージャ・ヨーガがあると。このラージャ・ヨーガはすべてを否定する。例えば、煩悩も否定する。例えば、現世的に生きることも否定する。そして、すべてを否定した段階で現われてくる集中、この集中をもとに修行を進めていくことになる。

では、次のクンダリニー・ヨーガは、そのクンダリニーの覚醒から、サハスラー・チャクラにエネルギーが至るまでのプロセスにおいて起きるいろいろな心の働きというものを放っておいて修行する。よって、これは現世的に修行することも可能である。しかし、当然そこで引っかかるから、もし次の生グルに巡り合えなければ、落ちてしまう。でも、一千生、二千生、あるいは三千生とかかる大乘の修行、これとクンダリニー・ヨーガのプロセスというものは大変よく似ているといわざるを得ない。

次は、マハムドラー、あるいはジュニアナ・ヨーガである。ジュニアナ・ヨーガというものは、例えば煩悩について、あるいは苦について、あるいは楽について、今まだ生じていないもの、過去に生じたもの、これを課題として考え、思索し続ける。ということは、経験をしていないのに、心の働きにおいてはそれをあたかも経験したかのようなかたちになる。

マハムドラーについて言うならば、これはグルがいて、その人の最も引っかかっている部分に課題を絞り、そしてその課題を瞑想修行の中心として置く。そして、それを乗り越えさせる。もちろんそれは、その修行者の引っかかっている部分だから、当然その課題を乗り越えると修行ステージというものは飛躍的に進歩することになるだろう。

そして、もちろんラージャ・ヨーガの到達点に限界があるように、ヒナヤナの到達点にも限界がある。

クンダリニー・ヨーガは多くの経験をするとというメリットがある代わり、その完成に至るまでの道はものす

ごく長い長い道のりということになる。これは同じように、マハーヤナものすごく長い長い道のりを歩いて、最終のマハーヤナ仏陀に到達することになる。

では、ヴァジラヤナはどうかというところ、その人の気づかない潜在的な煩悩、あるいは思考のプロセスというものに対してグルが完璧に見抜き、そしてそれを瞑想課題として突き付ける。当然突き付けられるわけだから、その人は苦しいだろう。その苦しみというものは、百生分かもしれない、あるいは二百生分かもしれないけれど、その苦しみを乗り越えたとき、その人は二百生分ジャンプしたことになる。あるいは、煩悩の喜びというものがあって、その煩悩を突き付ける。例えば、君たちが行なっているツァンダリーの瞑想法などは、その一つの例だ。もし、これをアストラル世界において、瞑想体験において体験することができれば、その歓喜というものは、君たちが実際、生身の体でセックスをするその比ではないはずだ。それを実際に経験することによって、そしてその煩悩を昇華させることによって、一生分、五生分、十生分といったその歓喜を経験し、それを昇華させていく。ということは、この経験は、当然大乘の仏陀に到達するスピードを速めることになる。

そして、三つの修行法がある。もちろん、これに合わせて、三つのグルのタイプが、師匠のタイプがいる。まずその第一は、ラージャ・ヨーガの指導者である。この人は現世否定、そして行中心、そして自分の経験した霊的体験を相手に伝えることができる。当然その弟子も現世否定、行中心、そしてそのグルの得た経験を聞き、今自分がそのグルの経験のどの段階にいるのかを確認しながら進んでいく。

第二のタイプのグルは、マハーヤナタイプのグルである。このタイプのグルは、現世あるいは厭世——つまり世を離れた生活——この両方に通じ、そして多くの教義を理解し、そしていかなる問題点に対しても答えることができる。しかし、それはあくまでも顕現されたカルマの状態を理解するだけであって、その人の煩悩の本質というものはまだ理解が及ばない。

そして第三番目のタイプ、この第三番目のタイプにはAとBというのがいて、このAは、タントラヤナのグルである。このタントラヤナは、弟子がどういう欲求を持っているかということを素早く見抜き、

それをうまく与えながら導き、そして解脱させる。

あるいは、Bのタイプがいる。これは、弟子の苦の状態を見抜き、そしてその苦をぶつけ、その苦に対して乗り越えさせ、解脱させる。

この三番目のグルは、本質的に煩惱というものの状態、そして煩惱というものの本質、これを完璧に見抜いていなければならない。もちろん、この三番目のグルは、Aの場合もあるし、Bの場合もあるし、あるいはA、B兼ね備えている場合もある。

そして、このヒナヤーナのグル、マハーヤーナのグル、タントラ・ヴァジラヤーナのグルという三種のグルがいるということを理解しなければならない。そして、三種の修行があるのだということを理解しなければならない。そして、その三種の修行、三種のグル、これらのどの修行を行ない、どのグルに付くかということが修行のすべての要素となる。つまり、その人が高い世界へ行けるのか、行けないのかという問題である。

例えば、もしその人が本当の意味での自由、そして大いなる救済を考えていて、ヒナヤーナのグルに付いたとしよう。ヒナヤーナのグルは大変綺麗である。なぜ綺麗かというと、それは世を離れているからである。しかし、世を離れているグル、このグルの心には、ただ自己の世界の完成だけがあり、他の人の本当の意味での幸福・自由を考えた生き方というものは存在しない。

では、早く結果を出したい、早く解脱をしたいと考えている人がここにいたとしよう。この人がもし、教義中心、そして出てきた煩惱についてはその教義を背景に説明することのできるグルに付いた場合、どうなるであろうか。

人間の進化というものは、魂の進化というものは、修行に入り、そして何千生、あるいは途中で失敗がある場合、何万生、何十万生、何百万生とかかる。例えば、仏典を読めばわかるとおり、一つの過ちによって五百生をふいにするとかいうのは、ざらである。ということは、早く解脱をしたい、早く結果を出したいという場合、このマハーヤーナのグルに付くということは時間的に大きなロスをすることになる。しかし、このマハーヤーナのグルというものは、人格的には優れている。それは徳を持っているからだ。そしてそれだけではなく、

四つの無量心というものを実践している途上にある人だから、大変心も豊かである。しかし、ちょっとゆったりにした、のんびりした雰囲気を与えることになるだろう。

そして第三番目のパターン、これはタントラ・ヴァジラヤーナのグルである。このグルは、当然ヒナヤーナについて、マハーヤーナについて、完全に修めていなければならない。そしてそれだけではなく、弟子の煩惱を完全に見抜き、そしてその煩惱を揺さぶりつつ、その弟子に気づかせる。そして、その煩惱を完全につぶさせる瞑想、あるいは生活の仕方を強いるグルということになる。ということは、このグルは最も大変といわざるを得ない。そしてそれだけではなく、憎まれることもある。そして、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナのグルの中で、この三番目のグルのみが逆縁を利用できるグルである。

今オウム真理教は、ヒナヤーナ、マハーヤーナを通して、そしてタントラ・ヴァジラヤーナの世界に入ろうとしている。しかし、本来これは一対一の真剣勝負ということになる。いや、言い方を換えるならば、一対弟子全員というかたちになる。そして、それをこなせるかどうか、グルの弟子に対する愛であり、あるいは弟子のグルに対する帰依ということになる。

しかし、弟子の中には、ヒナヤーナタイプの弟子もいる、あるいはマハーヤーナタイプの弟子もいる。その場合、無理をしてタントラ・ヴァジラヤーナの世界に足を突っ込むと、とんでもない目に遭う。

そして、わたしがなぜ今日この話をしたかという点、このけがれ切った世界の中で、本当の自己を見いださない限り、あなた方に本当の意味での幸福、あるいは自由、あるいは歓喜といったものはあり得ないんだという点、ここに理解しなければならないからだ。それ以外は、すべて幻影である。それ以外は、すべて価値のないことである。なぜならば、無常というものを根本としているからである。

そして、その無常の心の流れ、無常の身の行ない、無常の言葉の力というものを完全に克服し、それを越えることができたとき、あなた方は、その三つから完全に解放される形をとることになる。

そしてわたしは、あなた方が勇気を出して、自己のマハー・ムドラー、大いなる心の働きに挑戦し、そしてそれを打ち砕き、乗り越えることを期待してやまない。そのためには、強い意志の力、しっかりとした教義の

理解、そして、修行を進めることができるように大いなる功德を積むという、この三つの柱を大切に修行を進めてもらいたいと思う。

第十八話 (一九九〇年四月四日 富士山総本部)

今日はまず初めに、ダライ・ラマ政庁の方から、この前の『夕刊フジ』のまあ内容をウッタマーに英訳させて送ったわけだけでも、それに対する返事が来ております。で、これはまず、マハー・マヤー大師の方から読んでいただいて、そして今日の講話に入りたいと思います。

(マハー・マヤー大師) では日本語訳だけ読ませていただきます。

麻原尊師へ(これはカルマ・ゲーリック・ユトック、『夕刊フジ』のインタビュー、永岡さんのインタビューに答えたとされている人物からの手紙です)

麻原尊師へ、わたしは、この手紙を非常な、個人的懸念をもって書いています。尊師の三月十六日付の個人的お手紙により、尊師がわたしの、永岡弘行氏、およびその一行とのインタビューに関する『夕刊フジ』の内容をそのまま信じてしまわれたことを知りました。とても残念です。手紙に添付されていた記事の翻訳を読みました。が発達した文明国の一員が非文化的、非道德的、かつ違法的な行為に屈して、意図的に問題を起し、人間関係を壊そうとするなど全く信じ難いことです。しかも皮肉なことに善という名のもとにです。

記事の中でわたしが言ったとされていることの九九パーセントは、全く本当のことではないと知ったときには、怒るというよりも驚きました。はつきり言って、ねじ曲げられていない部分は一つもありません。永岡氏が大ウソツキであるか、彼のインド人の通訳が下手であったかのどちらかでしょう。

わたしの地位以外にある自尊心を持つ人間なら、だれでも永岡氏とその一行を訴えたことでしょう。日本の社会および政府がこのように無責任で程度の低い公共のメディアを野放しにしているとは全くショックなことです。明らかに、永岡氏によって後援されているこの記事に対する、わたしの言い返しのコピーを近々送ります。

良いにしろ悪いにしろ、永岡氏はわたしの七十分のインタビューをビデオ撮りしています。もしその録音

でのわたしの声を聞いてもらえるなら、そのときすべてが明らかになるはずです。わたしは最初から永岡氏が何をもくろんでいるのがわかっていたし、このドラマのすべてが何なのかもわかっていました。しかし、わたしたちはこのことについて話し合い、理解し合い、現在のこの状況を解決しなくてはならないと思います。

どうかわたしの意図を誤解なさいませんように。

一九九〇年三月二十七日 カルマ・ゲーリック・ユトック
——以上です。

(尊師)とまあ、こういう手紙が来たわけなんだね。で、まあわたしは、そういうこの手紙の内容に書かれている誤解という文があるけども、それはどうでもいいと考えています。どうでもいいというのはどういうことか。それは今日の本題、つまり信、あるいは帰依というものの対するわたしの考え方をこれからあなた方に話すことによって、あなた方はそのわたしの立場というものを理解していただいたらいいと考えます。

まず、わたしの帰依というものの考え方は投げ出すこと。投げ出すことというのは何かというと、自分のいっさいのものを捨てて、自分自身を投げ出すこと。これがわたしにとっての帰依です。

そして、わたしにとっての信とは何かというと、それはシヴァ神、あるいは仏陀をはじめとする、本来に成就された方々に対する信、そしてその方々がお残しになった、まず教えに対する信、そして現在、生を受けてらっしゃる高い霊性をお持ちの方に対する信と、この三つがわたしの信であると。そして、その信ずるものに対して、例えば「これはわたしは食べます」「これはわたしは食べません」「これはわたしは、行ないましょう」「これはわたしは行ないません」というような帰依の実践を、わたしはしていない。つまり、わたし自体を、まあ犠牲にするという表現は、ちょっと格好がいいかもしれないけども、要するに投げ出すこと、これがわたしの修行であると。そしてそれこそわたしは、帰依の実践であると考えています。

そして、一般的な修行のレベルだと、要するに仏陀に対する、法に対する、あるいは修行者に対する帰依、あるいは信ということになる。しかしわたしは、一般的な修行をしているだけではなくて、菩薩の修行、あ

るいはタントリックな修行、あるいはヴァジラヤナ的な修行を行なっています。ということは、わたしの帰依の対象というものは、単なる仏陀、法、そして僧伽、だけではなく、例えば、この世界、この宇宙の秩序を司っている者たちに対する帰依、そして絶対的な真理の守護者に対する帰依、そしてもちろん、わたしの本質的な帰依の対象というものは、そのすべてを包含しているシヴァ大神に対する帰依ということになります。つまり、そこに一寸の、あるいは五分でもいいけども、エゴというものが存在するならば、それは帰依の実践をしているということにならないんだね。

まあ今日ミラレバ大師の方から、被害者の会がどういう手紙を配ってるかという内容もちょっと読ませていただいたけど、まあはつきり言って読まない方が良かったと。それはなぜかというと、その内容、「麻原彰晃は、どうこう……」という、書かれている内容だとか、ほんとに心の汚れ、口の汚れみたいな内容を羅列してある内容だったんだね、それを聞くことによって、例えば少なからずカルマが彼らに返るということ、読むことによってカルマが返るということを気にすると、やっぱり読まない方が良かったと考えている。そして、わたしのその帰依というものはいかなる状況であろうとも揺るがないと。

で、ここで問題になってくるのは、なぜわたくしがカルマ・ゲーリック氏のその言葉に対して「どうでもいい」と言ったかというと、わたしはカルマ・ゲーリック氏を理解している。カルマ・ゲーリック氏の立場も理解している。そして、理解した上で、今回の、要するに手紙の内容というものをダライ・ラマ政府に英訳して送り、そして「チベット政府の立場というものは理解していますから、いかなるコメントが出ようとも、オウム真理教としてはいっさい反論をするつもりはございません」と。「ですからどうぞ、自分たちの、つまりね、チベット仏教を守る立場の菩薩の修行をなさってください」というような内容の手紙を送ったわけだね。で、そうではなくて、実際まあ返ってきたのはこういう内容であったと。

そして、これはオウム真理教にとってはプラスに働くでしょう。しかし、プラスに働いたとしても、それに対して興味を示さないと。あるいは前回のように、今マスコミが行なっているように、すべてがマイナスの方向に行ったとしても、それに対して心は動かないと。

自分の修行の目的は、完璧な帰依の完成だからであると。言い方を換えれば、悪い条件のもとで、自分自身を投げ出す。悪い条件のもとで、自分自身の信の実践をすることこそ、わたしは崇高な修行者の実践であると考えているからです。

そして、この帰依の実践こそ、ヴァジラヤーナの菩薩の修行であると考えています。

よく、大師方と話していて、「これはOKだけど、これはOKでない」と。例えば「これはグルの言うことだから行なうけども、これは自分の意に合わないから行なわない」という発言をよく聞きます。そのときにわたしは、よく、以前のわたしはこうだったんだと、そして、今、彼らが修行の途上にあるんだということを、そこで再認識すると。そしていずれ、彼らも必ず今のわたしと同じように、完璧なる信、あるいは完璧なる帰依の実践の修行に入っていくだろうと。それまで辛抱強く待つしかないなど。

あるいは、シャモンになりたての人が大師の批判をすると。そのときにわたしは、今の大師の中で批判をされる大師は、やはりシャモンのときに大師を批判して人たちだったんだと、それを再確認すると。ま、いろんな人に確認してね。そこであらためてカルマの法則というものは完璧であると。批判をする人は必ず同じかたちで批判をされると。つまりカルマの法則というのは完璧なんだと。それによって自己の帰依の実践というものを、よりいっそう強く行なう。そして確認をしながら進んでいくと。

そして、今の被害者の会の方々、あるいはマスコミの方々がいかに哀れであるか。例えば聖者を誹謗した場合、いったいどういふ世界へ生まれ変わるんだろうと。例えば修行者を誹謗した場合、いったいどういふカルマが返ってくるんだろうと。例えば神々を誹謗した場合、いったいどのようになるんだろうと。しかし、それがまかり通るようになると。確かに小さい期間、眺めれば、それはカルマの法則から逸脱してるかのように見えるかもしれない。しかしそれは長くは続かないと。

それは、ちょうど低温やけどに当てはめることができる。ここに、例えば四〇度の湯たんぽがあつたとして。四〇度の湯たんぽは熱くないと。だから、それをずーっと体に当てていたと。痛みもないと。ところが、それが例えば六時間、八時間、十時間と続くと、その部分はただれと。今彼らのなそうとしているこ

とは、そういうことなんだと。

そしてわたしたちは、ここで正念をして、しっかりと自分自身を見つめて、そして自分のいったい帰依していたものは何なのかと。帰依の対象とは何なのかと。それをもう一度認識する必要があるだろうと。

例えば、信徒の中で、ダライ・ラマ法王政庁のカルマ・ゲリリック氏が『夕刊フジ』、あるいは雑誌・TVで言ったような内容を見て、そしてそれによって信がなくなつて落ちていった人たちがいると。しかしそれはおかしな話である。なぜおかしなのかと。では彼らはチベット仏教に対して帰依をしていたのかと。だとしたら、オウム真理教に入信すべきではない。だとしたら、チベット仏教に入信すべきであつたと。しかし、人間というのは情報に流されやすい。そして、無智なるがゆえに、その情報の正当性、あるいは誤謬性といったようなものに対して、全く判別がつかなくなると。

そして、最も大切なものは、今自分の行なっているもの、これに対してひたすら実践をし続けることである。

オウム真理教は受難の時代であると、これは大師方がよく口ずさんでいる言葉だけどね、しかしわたしは、今のわたしは受難の時代ではないと考えています。なぜならば、例えば叩かれたら、それだけ時間ができると。時間ができれば修行すりゃいいじゃないかと。それだけステージが上がると。ステージが上がることによって、例えばホーリーなヴァイブレーションを振りまくことができると。あるいは思索をする時間ができると。そうすると次に、例えば信徒と会うとき、あるいは凡夫・外道と会うとき、よりいっそう高いステージのもと、相手と接することができるじゃないかと。——つまり、こういう社会的活動が阻害されてるとき、内側を充実すればいいじゃないかと。わたしはこれが修行者のとるべき態度だと考えます。

もちろん、例えば成就してしまった菩薩、あるいはヴァジラヤーナの菩薩、あるいはタントラヤーナの菩薩、あるいは仏陀、こういう状態になった場合は、また違った視点でものを見なければならぬ。しかし少なくとも、まだ道のスタートに立っている人たちは、例えば「周りを入信させることができないうです」と、例えば「支部活動がうまくいかないうです」と言う暇があつたら、自分自身の霊的ステージ、あるいは心のステー

ジというものを充実させる方向に向けると。そして、確固たる自己を確立することによって、その人の修行というものは実を結ぶと。そして実を結んだことによって、その人と話をする人、あるいは悩みの相談を投げかける人たちが楽になると。あるいは問題が解決すると。これこそわたしはヒナヤナの実践を行なっている者のとるべき道ではないかと考えます。

今回のカルマ君の手紙でわかるとおり、情報というものは無常である。そして、ある意図によって作られた情報というものは、すべてわたしたちを苦しみの世界に叩き込むんだということを再認識しなければならないのか、そして今、あなた方が、あるいはこのビデオ説法を聞いている方々が何を実践しなければならないのか、そして目的は何なのかというのを再確認しなければならない。

「人間、万事塞翁が馬」。これわたしの好きなことわざの一つです。つまり、楽しみの状況にあるとき、その楽しみに溺れない。苦しみの状況にあるとき、その苦しみに悲嘆しない。ただ自己のなさなければならぬことを淡々と消化していく。黙々と行なっていく。これこそが必要なことなのではないかと考えます。

わたしは今の被害者の会の行動そのものは「名人の木登り」だと考えています。いずれ彼らは墓穴を掘るでしょう。そして、マスコミも同じように、いずれ墓穴を掘るでしょう。それはカルマの法則というものは絶対だからです。そしてわたしの帰依しているもの、その最も中心をなす理論、それはカルマの法則だからです。

第十九話 (一九九〇年五月十三日 杉並道場)

まず、今までのいろいろなオウム・バッシング、そして麻原彰晃叩きというものの、これがあつたわけけれども、そこでまず、皆さんが考えなければならぬことが、わたしは一つあると思います。つまり、それは何かというと、まず今のオウム真理教以外で、皆さんに高い世界への道を示している教団があるかどうかということ。もちろん、わたしもこの日本の他の教団のすべてを知るわけではないから、それはないとは言いきれない。でも、少なくとも完璧なたちで皆さんにそれを提供している教団というものは、オウム真理教しかない。ところが、今までのオウム叩きの内容そのものは、その教団の、つまり皆さんに与えるいい意味での影響というものを全く無視し、偏った情報を流すと。しかも、その情報について、例えば正確に伝わるならばいいけれども、そうではない。

ここで、一つ皆さんにお話をしておきたいことがある。成就というものには、三つの面があるんだということ、まず話さなくてはならない。そして、成就というものは、六つのものを具足しなくてはならないということ、皆さんに話さなければならぬ。

それは何かというと、まずグヤサマジヤの三面である。グヤサマジヤの三面とは何だと。これは、要するに、強烈なる怒りのエネルギーを爆発させることによって、救済する。よく私が論戦をするときに——まあ、周りには「過激」という言葉を使うわけだけれども——強い口調になる。しかし、これは、タントラ・ヴァジラヤーナの成就における、右の氣道、つまり完全なるピンガラ氣道の浄化が起きるならば、当然生じる状態である。それは、この世の中に対する矛盾というものに対して、救済を背景としてその自分の全エネルギーをぶつけるということが背景となってくる。

ところが、一般に日本の宗教観念というものは、ヒナヤナ、小乗的な観念が強いから、要するに宗教家はおっとりしていればいいと、そして、どんと構えていれればいいとされている。確かにわたしにとつて、どんと構えておくことは最も楽である。しかし、今生、カーリー・ユガの時代に生まれている皆さんを救済するため

には、もちろんここに集まっていられつる方は徳の高い方だろうから、その必要はないかもしれないけれども、一方的なマスコミの情報によって落ちていった信徒も一割くらいいることは事実である。すると、その人たちに對して、どのような面でわたしは接しなければならぬかということ、あるときは怒りをバックボーンとして接しなければならぬ。まず、この面が強調される。

それからもう一つ、次は左の氣道の浄化、イダー氣道の浄化によって、無智というものが現われてくる。この無智というものはどういふことかという、いっさい意に介しませんよと、わたしは無反応ですよと、わたしは感じていませんよという面を示さなくてはならない。

で、マスコミで表現される麻原彰晃のイメージというのは、おそらくこの二つだと思う。しかし、これもグヤサマジヤの三面の中の第二番目の面にすぎない。

そして、第三番目の面は、サットヴァ性、執着、これがポイントになってくる。このサットヴァ性、執着とはいったい何かというと、これは救済に対する執着である。つまり、自己の解脱、この解脱がすべての魂の救済につながるならば、その解脱の本質的な意味合いというものはないんだということだね。

そして、その救済に使われる六つの道具、これが、グヤサマジヤの六本の手で表わされている。

ところが、宗教性の低い日本人にとって、このわたしの三面の顔、三面の様相というものは理解されない。では、果たして、麻原彰晃に神秘的力があるのかどうかという点に對してはどうだろうか。まあ、これはいろいろな神秘的な要素というものを備えていなければ、グルとしては存在しないわけだから、例えば一つの例を挙げるならば、選挙期間中、わたしはフジテレビのインタビュに對して、「わたしは今選挙に對して意識を集中しているから、シャモンが二日に一人、あるいは一日一人くらいのペースで落ちていきます」という話をした。ところが、選挙が終わり、まあ説法の回数そのものは増えてはいないんだけど、瞑想に入った段階で、出家した弟子たちが落ちなくなった。それどころか、より確信を持って修行するようになった。これは何かというと、コーザルのデータの入れ換え、あるいはアストラルのデータの入れ換えにほかならない。

それからもう一つ、マスコミの動きを検討しても、この前フジテレビで、グヤサマジヤの右の面、つまりピ

ンガラ、怒りの様相を背景として意図的に論争したわけだけれど、それ以後マスコミがほとんど動かなくなつた。

神通力には、二つのタイプがある。一つは見世物の神通力である。もう一つは、救済に使われる神通力である。そして、それは、仏典ではこのような表現をされている。それはどういふことかという、戒・定・慧、この三つの修行を達成した者は、解脱に到達すると。そして、解脱に到達した者は、解脱智見を得ると。この解脱智見とは何かといったら、その人の欲する神通力を得るといふふうに考えてよろしい。そして、わたしの欲している神通力そのものは、皆さんを、多くの魂を、マハー・ニルヴァーナに早く到達させるための力である。よって、あまり見世物的な力は欲しない。

今、オウム真理教の中で、例えばマハー・ケイマ正大師や、マハー・マヤー正悟師、あるいはマイトレーヤ正悟師が、神通力を少しずつつけ出している。これは、三番目のヨーガ、マハムドラーが、明らかに解脱の点を示していることの一つの証明であらう。そして、わたしはマハー・ケイマ正大師やマハー・マヤー正悟師、あるいはマイトレーヤ正悟師のつけている神通に對して、よく「子供だましたね」と話をする。その話は何かという、確かに仏典に説かれているような神通力ではあるけれども、それはまだまだあまり救済には役立たない。本当に救済に役立つ神通力を早くつけていただきたいと考えている。しかし、この三人が、確実にこの解脱智見を得ていっていることは間違いない。ということは、近い将来において、わたしと同じように、多くの魂を利用する神秘的なパワーというものを身につけることになるだろう。

そして、この戒・定・慧・解脱、そして解脱智見を得た者がこの世に登場すると、何が生じるのか。それは、出家修行者が生じる。出家修行者が生じるとはどういふことかという、この現世的な束縛の中で解脱をしていくということは、タントラ・ヴァジラヤーナのよほど優れた修行の素質を持っている者以外は不可能である。だとするならば、出家し、そしてこの社会の觀念から離脱し、そして新しい解脱のための理念を植え付け、そしてそれによって修行を進め、絶対的な自由・幸福・歡喜を得るといふ、そういうものが必要であると。そして、その価値を皆さんに提示し、提供し、その価値をわかっていただけるだけの力が必要なんだということだ

ね。

オウム真理教に対して、「被害者の会」というものがある。しかし、この「被害者の会」というものは、本来は「加害者の会」である。なぜ「加害者の会」なのかというと、つまり、本来の意味で、自由・幸福・歓喜を得ようとしている自分の肉親に対して、それを阻む。完全に地獄へ落ちる道を歩んでいる「加害者の会」といわざるを得ない。これは断言しよう。わたしが否定しようと、あるいはわたしがそれはあり得ないと言おうと、間違はなく「被害者の会」の者たちは地獄へ落ちるだろう。それは、二千五百年前、仏陀釈迦牟尼が約束していることだからだ。そして、わたしも同じように見解を持っている。同じように、マスコミも地獄へ落ちるだろう。それは、真理というものの芽を摘み取ろうとしているからだ。それは、この宇宙の秩序が約束した、絶対的な真理である。

では、この世の中の不条理というものを離脱し、そして戒と定と慧を得、そして解脱に到達し、解脱智見を具した者は、いったいどういう世界へ行くのだろうか。それは、その人の機根と、それからどの程度マハーヤーナの修行、あるいはタントラ・ヴァジラヤーナの修行をしているかによって、到達する世界が違ってくる。

まず、最高の位、つまり最も優れた解脱智見の持ち主は、この現世にいて完璧な仏陀の状態になり、そして現世大涅槃をするだろう。次に、確かに神通は身につけているけれども、まだ例えば多くの者を出家させ、そして救済させることのできない者は、死の瞬間、マハー・ニルヴァーナへの道を歩くことになるだろう。そして、まだ死後の世界を完璧に理解していない者は、中間状態に入ったとき、つまりバルドーに入ったとき、マハー・ニルヴァーナへと入る光の道を通っていくことになるだろう。そして、まだ観念的な、功德あるいは悪業というものに対する若干の引っかかりを残している者は、同じように光の道でも白銀の道を通って上がっていくことになるだろう。そして、まだ美しさに対して執着をしている者、あるいは醜さに対して若干の嫌悪のある者は、色界で修行し、それを完全に落とし、マハー・ニルヴァーナに入るか、あるいは色界で単にそのカルマが落ちるまで待つて、自動的にマハー・ニルヴァーナに入るかの、どちらかの道を選ぶだろう。そして、

この欲界が完全に破壊し終わるまで、つまり、すべての魂がマハー・ニルヴァーナに入るまで、この身を置くうと考えている者は、つまり身体に対する一つのこだわりがある者は、色究竟天——これは光音天の最高位に属するわけけれども——その世界へ生まれ変わるだろう。このようにいわれています。そして、わたしもいろいろな世界を経験している。

するとね、みんなはこう考えるかもしれない。「いや麻原、それは幻影ではないか」と。では、幻影だという人に対してお聞きしたい。過去において、生まれてからこの方、そういう情報を入れていないのに、なぜそういう経験をしていくんだと。もし、そういう情報を入れているならば、確かにそのイメージの世界で遊べるかもしれないけれど、そういう情報を入れている者が、なぜそういう経験ができるんだという疑問をわたしは発したい。それは、つまり前生からの植えつけられたデータではないかと。

つまり、神秘的な体験には二通りある。一つは思い込みの体験。もう一つは、思い込もうとしても思い込めない、つまり経験をしたことのない体験。この二つがある。そして、前者は、要するにラヤ・ヨーガ的な、イメージ的な修行法の一段階にすぎないが、後者は、明らかにその人の前生からの精神的ステージ、あるいは霊的ステージを表わしていることは間違いない。

皆さんは、これから何をなさなければならないのか。それは、皆さんが肯定しようとも、否定しようとも、必ず死ぬんだということをまず前提に置かなければならない。そして、例えば今四十歳の方は、あと四十年、あるいは五十年、つまり八十歳、九十歳で死ぬんだと。それまでの間には、必ず完璧な保険を掛けるべきである。

実は昨日、シークレット・ヨーガの一つで、こういう話があった。自分は、ご主人に引っ張られてオウム真理教に入信したと。でも、自分はオウム真理教に対して理解できないと。これは、ご主人は一生懸命修行なさっていて、奥さんがそれに対して反対した例だ。

そこでわたしが答えたのは、こういう内容だね。つまり、死後の世界はないかもしれないと。しかし、あるかもしれないと。そして、あなたは、死後の世界はないと断定のできる経験をしましたかと。ところが、死後

の世界が存在するという経験を、例えば仏陀釈迦牟尼にしろそうだし、それはわたしにしろそうだし、あるいはイエス・キリストにしろそうだし、マホメットにしろそうだけれども、経験している。ところが、死後の世界がないんだという人に対しては、その死後の世界がないという経験をしていないはずであると。

この現世に対して、たかだか四十年、五十年に対して、例えば給料の五パーセント、あるいは十パーセントかもしれない、あるいは三パーセントかもしれないけれど、いろいろな形で保険を、わたしたちは掛けている。それと同じような気持ちで、死後の世界に保険を掛けるような気持ちで、ご修行なさったらどうだろうか。ただ、この保険というものは、お金の問題というよりも、自分の人生の一部分の時間を切り割いて、そしてそれに充てなくてはならないという違いがある。

オウム真理教の信徒として、皆さんがまず考えなくてはならないことは、必ず自分自身は死ぬんだということだ。それは、皆さんが肯定しようと、あるいは否定しようと、死ぬんだと。そして、その死というものは、皆さんの修行によってのみ、乗り越えることができるんだと。それ以外のものでは、決して乗り越えることはできないんだということを断言しなくてはならない。そして、それをもとに、もし皆さんが智慧があるならば、今日から、例えば五分、あるいは十分、あるいは一時間と修行を続けていくだろう。もし智慧がなければ、現世的な煩惱に負け、日々流され、死んだ瞬間、「しまった」と思うだろう。

ここで、わたしの弟子に三種類あるということをお話ししなくてはならない。その第一は、まず入信はしているけれども、ほとんど修行していない人。次は、入信し、信徒として一生懸命やっている人。そして、出家し、わたしの弟子として修行しているという三つのグループがある。

第一のグループは、三悪趣から離脱するための切符を得たといえるだろう。しかし、その人がその切符を使うかわからないか、その人がその列車に乗るか乗らないかは、その人の自由である。つまり、まだその人は三悪趣から離脱はしていないといえるだろう。

第二番目の、信徒として一生懸命やっている人たちは、当然今生、この現世というものは悪業の巢窟だから、その悪業に対して善業を積むということによって、悪業と善業のバランスによって、この欲界の中の上位の世

界、つまり人間、それから阿修羅、それから天界という三つの世界に生まれ変わる切符を得ているといえるだろう。それで、その三つの中どの世界に生まれ変わるかは、その人がどれほど一生懸命修行するかによって違ってくる。

そして、出家した弟子たちは、今生善業のみを積み、そして悪業、カルマを落とすということによって、色界に生まれ変わるか、あるいは先程言ったとおり、解脱し、解脱智見を得、そしてマハー・ニルヴァーナへ到達するかの、どちらかの切符を得ているといえるだろう。しかし、これも同じように、出家し、そして全力で修行した場合の話である。もし修行しなかったならば、それは同じように三悪趣へ落ちるかもしれない。

皆さんは、稀な徳によって今ここへ集まり、そして修行のチャンスを得ている。これほど膨大な教義があり、そして個々に合った指導法を持つ教団はない。皆さんは、皆さんに合った今できる修行法、これからまず始め、そして一步一步修行を進めて、最終的にはマハー・ニルヴァーナへ到達していただきたいと考えている。

わたしは、ハルマゲドンが来ようと思まいと、そんなことはどうでもいいと考えている。それはなぜかというと、これはグルヨーガ・マイトレーヤ・イニシエーションの中でも少し話したが、どんな状況にあらうとも、もし大いなる功德があれば、逆にこの人間の悪業の世界から離脱し、阿修羅や天界へ生まれ変わることが出来るからである。大切なことは、どんな状況に陥らうとも、自分自身を律し、そして修行し、高め、そして高い世界に生まれ変わるための自分の心を確立することが必要だということだ。

もちろん、まだ、今死んだら大変な世界に落ちてしまうという人のために、あるいはそうではなくて、もつと長く生き、そして多くの魂を救済したいという人のために、今富沢の方に約二千人収容できるシェルターを用意しています。これは、おそらく五月の十七日くらいに完成するでしょう。

わたしは、皆さんとの約束は必ず守る。例えば、シランバラ化計画も進めていくし、それから、多くの解脱者をこれから出していきたくて考えている。あとは、皆さんの、身・口・意の三つの業に、それを受けるだけの、つまり解脱していくだけの善根が生じているかどうかで決まってくるでしょう。

五蘊形成がその魂のすべてであることは仏典に説かれている事実である。そしてこの五蘊形成を分析すると、次の生、どの世界へその魂が転生するか、よく理解できる。あるいは、どういうカルマによってその魂がそこへ存在したのかも理解できる。例えば、厚い皮膚を覆い、その上に厚い毛が付いていると。そして、そのもののイメージは食えることと、それから性的なイメージ、しかもそれは衝動的な性的なイメージ、そしてその食べることも自分より弱い対象に対してはえ、かみ付くと。その魂の意識は飼い主に対して忠実であり、そしてその飼い主の例えば悪法における指示においても、それに柔順に従うと。

おやおや、これは何かなと。皆さんのよく知っている狼犬であると。ではこれを人間界に当てはめた場合、そういう魂がいまいだうかと眺めると存在すると。例えば大変エゴが強く自と他の区別をはっきりなし、そしてこの身体こそ我であると自覚する魂がいる。そして、その魂の意識の中にはデータとして食べることに、それから衝動的状态において性的交わりを行なうこと、そして弱い者をいじめること、そして強い者の指示なら何でもその指示に従う。つまりこの魂の五蘊のデータによってこの魂は次の生、動物へと転生するのである。

では、ここに魂が存在していて、その魂は肉体こそ我であると考えている、そして、不死の肉体を持ちたいと。その魂の意識はひたすら対象を傷つけること、破壊することにあると。そしてそのためには手段を選ばない。つまりその魂の心は殺伐としていて、その対象に対する憎しみしか存在しないと。この魂は当然死のない世界、つまり苦痛しかない、憎しみしかない世界へと転生する。死がないとはどういうことかという、その身体に対する愛着が消えるまで、何度も何度も死んでは生まれ変わり、死んでは生まれ変わりを繰り返すと。つまり地獄へと転生するのである。ではこのような対象がこの人間界に存在しないかという、皆さんもよく知つてのとおり、多くの魂が存在している。

では、多くの食物があり、それを腐らせる。施せばいいのに腐らせると。そして絶えず不安にかられ、大金を金庫にしまい込み、あるいは通帳にしまい込み、その不安を何とかごまかそうとして生きている。そして得

られた衣服や食物や、あるいはその他の物質に対して、独占欲の固まりとなり、他の者に対してそれを振りまこうとしない。こういう魂はこういう魂だけの世界へと転生する。そして一定の物質に対して多くの生存者がそこに存在し、そして食べられない、着ることができない、あるいは得られないといった苦しみを味わうことになる。もちろんこの世界は餓鬼なのである。

そして、これら三つの要素を若干でも克服し、ある程度功德を積んだ魂の行く世界、その世界が人間なのである。

もともと欲六界という言葉は北伝仏教にのみ存在する言葉である。南伝仏教においては五界、五つの世界とすることで表現されている。この五つの世界とは何かというと、地獄・動物・餓鬼・人間、そして天界である。そして次はこの天界、つまり天とは上の世界であり、この上の世界を小さく分けて、憤怒天・戲忘天、この戲忘天も六つの世界へ分けると。正確にいうならば、この戲忘天の第一天界に憤怒天を置いてある。そして欲の天界の上に貪りのない天界、つまり神聖天、梵天の世界を形成させ、その延長上に形のない世界、つまり無色の世界、非存在の世界、コーザルを形成させると。そしてそのコーザルの広がり深さ等によって、マハー・ニルヴァーナを形成させると。これが仏教観のすべてである。

もちろんこれに対して、後世の仏教徒は大なる反論をなすであろう。いや、タントラの世界観はまた違々と、あるいはまたヴァジラヤーナの世界観はまた違々と。しかし、それらの世界観は全く違うのである。全く同じなのである。では、何ゆえに同じといえるのかと。それは例えばタントラの世界観あるいはヴァジラヤーナの世界観は、欲界の裏側である低位アストラル、あるいは低位コーザルをもつて一つの世界観としてその世界を示しているから、つまり仏教的な世界観に比べて、仏教的な世界観は欲界・色界・無色界だけでも、このタントラ的世界観においては、まず欲の世界に三つ、それから色の世界に二つ、そして無色の世界が一つと、その上に、まあマハー・ニルヴァーナが存在するというところで、実際に六つ、あるいは七つの世界観を形成することができるわけである。

これはどういふことかという、仏教的修行とそれから密教的修行との間に隔たりがあり、深い意識状態へ

入るテクニクとして、密教的技法が優れてるから、そういうことになったわけである。しかし実際には深い意識状態に徳がなく入った場合、それは悲惨な目に遭うことになる。

例えば例を挙げるならば、仏教的修行法というのは四預流支という典型的な修行法がある。この四預流支は八正道、七覚支、五根五力、二正勤二正断、あるいは四如意足といったもの、すべての仏教的修行体系を内在している。それはなぜかという点、まず第一に三宝帰依という四預流支の土台。第二にその帰依の対象の教えをひたすら学ぶ。そしてそこで記憶修習するという第二番目の土台。そして記憶修習したものによって、自己の身・口・意について考え分析し、そしてそのカルマを落とすという第三番目の土台。そして身・口・意について考えたものを実際に実践するという第四番目の土台。

しかし、これはよく考えてみると、例えば第四番目の身についての法行、これは何を意味してるかというと、これは殺生を離れ、偷盗を離れ、邪淫を離れと。口についての法行、これは何を意味してるかというと、妄語を離れ、綺語を離れ、悪口を離れ、両舌を離れる。心についての法行、これは何を意味してるかというと、貪りを離れ、嫌悪を離れ、そして無智を離れる。つまりこれは十の戒めの達成を意味してるわけである。あるいは、法にのっとりものを考え実践するわけだから、当然この中に七覚支も存在してるし、あるいは二正勤・二正断も存在してる。あるいは四如意足、あるいは五根五力も内在していることになる。ということはこの四預流支こそすべてであり、そして四預流支の変形こそ、三十七菩提道品ということになる。

では次に、この修行を達成するとはどういうことかという点、その人の持っている純粹な心の働きを最大限に生かし、身の行ない、口の行ない、心の働きを統御することである。ということは、この三十七菩提道品の修行というものは、魔境に入らず、そして、スピードは遅いかもしれないけど、いずれの生においては、必ずや仏陀の境地へ到達できる素晴らしい法なのである。

ではタントラの教えとはどういう教えかと。あるいはヴァジラヤーナの教えとはどういう教えかと。タントラの教えとは、要するに、その乗り物であるマントラ、実はこのマントラというのは、例えば八正道の正念に当たるわけだけでも、その正念、そして正サマディという、正記憶修習、正サマディというこの二つにポイン

トをおいて、修行法を絞り込んだ修行、これがマントラ修行なのである。それはどういうことかという点、例えば「オーム・ソーハム・シヴァム」という言葉があると、「我はシヴァなり」と。つまりわたしはシヴァ神であるという記憶をひたすら修習すると。そしてサマディに入ることによってシヴァ神と合一すると。つまりこのプロセスはまさに正記憶修習、正サマディなのである。あるいは例えば「オーム・マニ・ペメ・フーム」のマントラがあると。この「オーム・マニ・ペメ・フーム」という観音様のマントラを唱えることによって、オーム、天界から、フーム、地獄界までの六つの世界のカルマを破壊すると。それを記憶修習すると。そしてそのデータによって深い意識状態へ到達すると。しかしよく考えてもらわなきゃならないのは、このマントラ修行においては、言葉、マントラ、手印、行為、そして観想、これはイメージ、あるいは意志・意識、こういうものすべてを含むわけだけど、これにおける善業を積んではいえず、実際に人間の本性である基本的な三業についての浄化がなされていらないということになる。逆の言い方をすれば、三業の浄化をしてこそ、初めて本当のマントラ修行ができるわけである。ということは、このマントラ修行によって行く世界は、もし身・口・意の三業の浄化がなされていなければ、当然低いコーザルを見、あるいは低位アストラルを見ることによって、その人は仏教で説かれてる世界観と違った、形のある、そしてけがれた世界を見ることになる。それによって、いや、もっと仏教の世界観以外に世界が存在するんだということをその人は主張することになる。

ヴァジラヤーナの教えとは何かというと、心のみを中心としている。つまり意識のみを中心としている。なぜ意識のみを中心してるのかというと、これは輪廻転生においてわたしたちのこの肉体も、そしてイメージ的なものもすべて取り払われ、超潜在意識のみがそこに存在すると。だとするならば、超潜在意識のみを浄化すればそれでいいじゃないかということになってくる。つまりヴァジラヤーナの教えにおいては自分自身の死イコール仏陀の境地ということになるわけである。なぜかという点この修行者は、超潜在意識のみを仏陀の境地へと合わせようとしているから、この肉体がなくなったとき、あるいは意識、意志やイメージ、五感がなくなったときにチャンスなのである、仏陀の境地へ到達する。しかし、これも、もし失敗すれば、また次に大変自分自身に合わない身体を持たなければならなくなるわけだから、これも苦しみを経験することになる。そし

てこのヴァジラヤーナの瞑想においてはコーザルへ到達して、はじめて価値のある体験をすることになる。

ということは、あくまでもやはり南伝系の土台の修行をしつかり行ない、そしてマントラ修行を行ない、そしてヴァジラヤーナの心を培うという修行の体系こそ本当の意味で早く、そして絶対的な境地へと到達する修行なのではないかとわたしは確信を持っています。そしてここにその法がある。その法を実践するかしないかはあなたの方次第である。人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。しかしここに集める者は、死を超えるために、そして生を超えるために出家したわけである。その意識を強く持って、今日これから功德を積み、十の戒めを達成し、マントラ修行に励み、ヴァジラヤーナの心を培っていただきたいと思います。いいね。

(サマナ) はい。

第二十一話 (一九九二年二月二十六日 上九一色村教学センター)

一九九二年の一月も、もう少して終わります。わたしたちは一九九七というタイムリミット、そして二〇〇一から二〇一四という、偉大なるこの地上の変革、これらの真ただ中に身を置きながら、それらの現象にいつさいとらわれることなく、自己のなさなければならぬことをしっかりと見つめ、そして正しく優れた輪廻転生を繰り返す、最終的に大いなる煩惱破壊によって、いかなる世界へ生存しようとも、あるいは生存を完全に断絶しようとも、それらの世界において完全なる幸福・自由・歓喜という三つの状態を得る、そのために、もしわたしたちが日々の瞬間瞬間の出来事に対して、集中し、そして対象に対して正確に分析し、その分析によって大いなる精通を得ることができるとするならば、それこそ真の意味での到達眞智運命魂、つまりボーディサットヴァということになります。

修行には、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラヤーナ、ヴァジラヤーナ、そしてテラヴァーダの教えが存在しています。一部では、小乗、イコール、テラヴァーダというふうに考えますが、実際そうではなく、テラヴァーダの教えの中によく隅々まで検討すると、四つの修行、つまり善の修行、徳の修行、そして法則の修行と寂靜の修行、これらの初めから終わりまでの具体的な、かつ実践的な方法が述べられています。そして、これらは、この四つの修行はすべて、四つのヤーナ、つまりヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラヤーナ、タントラ・ヴァジラヤーナの四つの実践体系を表わしていることになります。

したがって、テラヴァーダの教えの中には、この四乗はすでに含まれているということができそうです。しかし、このテラヴァーダは、あくまでも全体的、かつもともと仏教的、あるいは真理に対して特性の優れた人の行なう修行法です。もし、特性が優れていなければ、自己の特性を見つめ、自分に合った修行法、これを確立していくべきでしょう。

では、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラヤーナ、ヴァジラヤーナについて、一つずつ簡単に説明しましょう。

ヒナヤーナとは、隔絶された空間で、自己の心を止滅する。寂靜へと向かうと。これがヒナヤーナの教えの根本です。したがって、この教えは大変一人に強く、また外的刺激の多い環境においては、逆にもろさが生じます。よく、あの人は現世的に徳がないんだが、なぜ修行しているんだろうと。そして、なぜ神秘的な体験をするんだろうと。その人はあまり人付き合いがないという、このような人は、まさにこのヒナヤーナの道を歩く素質を有していることができるでしょう。

では、第二のマハーヤーナ、このマハーヤーナというのは、わたしたちが、この現実の世界において、大いに徳を積み、善をなし、そして教えを広めるといったことが、修行の根底に存在しています。したがって、この人たちは大いに人から好かれ、社会的にも高位高官に昇ることは間違いありません。しかし、もし、この人がヒナヤーナの土台、つまり個人、一人になることに対する弱さを含んでいるとするならば、結局それは死のときに、積み上げた徳のすべてを昇華したかたちでの輪廻転生というものは不可能となるでしょう。

では、次はタントラヤーナです。このタントラヤーナの教えは、まさにこの人間世界の法則に精通し、そしてこの人間世界の法則にのっとって修行を行なうと。もちろん、チベットのタントラヤーナの教え、これは代表的なものです。これと対比したかたちで、『旧約聖書』における教え、これもタントラヤーナの教えを多分に含んでいるとわたしは考えています。つまり、タントラヤーナの教えとは、この人間の世界において、いかに風の働きを上昇させるかということが狙いです。

では、ヴァジラの道、ヴァジラの乗り物、ヴァジラヤーナとは何であるかと。これは、わたしたちが、この現実世界における現象に頓着することなく、心の本質を知り——この知るといのはね、下に目のつかない知るだけでも——そして、しっかりとその心の本質にしたがって、この人間世界を生きていくと。これがヴァジラヤーナの教えです。したがって、この場合、現象を見ただけでは、その人の本質的な修行レベルというものは理解できないと。

そして、このタントラヤーナやヴァジラヤーナの教えは、別の言い方をするならば、「狂気の悟り」といわれています。なぜ狂気なのかというと、一般的に見て、これが本当に修行だろうかというようなことを行ない

ながら修行をしていくからです。

では、例えば、これらのタントラ・ヴァジラヤーナの教えと、テラヴァーダの教えの共通性の一つ、二つを紹介し、考えてみましょう。

例えば、ミラレパがマルバの命によって、建物をいくつも建てては壊され、建てては壊されたという話があります。これらはまさに、テラヴァーダにおける忍辱の修行であるといわざるを得ません。つまり、いかなる環境であろうとも、心をいっさい動かさない訓練をすること。これをミラレパは実践させられたのです。

あるいは、マハーモッガラーナの前生において、あるびつこの在家の者を教化したという話があります。これは、そのびつこと全く同じ変化身を取り、そして教化したという話があるわけですが、この話はまさにヴァジラヤーナの教えであるといわざるを得ません。

このような形で、チベットのタントラヤーナや、あるいはヴァジラヤーナの教え、それとテラヴァーダの教えが、本質的には共通であるということを認識するならば、テラヴァーダの修行を実践していく上において、わたしたちは大いに北伝的な修行についても、参考として生きていくことができます。

そしてね、この一九九二年は、まず皆さんに何としてでもテラヴァーダの全体系、パーリ仏典の翻訳を完成したいと。そして、皆さんにぜひとも読んでいただきたいと考えています。この経典を読むことによって、日本に初めて、仏教の全体系が伝わるんだなと考えているからです。

わたしたちは、日々、瞬間瞬間を生きています。この日々瞬間瞬間を生きるということは何を意味するのかというと、つまり身の行ない、言葉、そして心の働きという三つ、これを絶えず行為として積み続けているわけです。そしてね、これらの身・口・意の集積こそが、来世を決定します。

では、わたしたちは、どのような生き方をすればいいのかと。例えば、ある人が家に閉じこもり、経典を読んだと。そして、教えについて考えた。そして、言葉において沈黙の行をなした。これはヒナヤーナにおける、最高の修行法の一つであるとわたしは考えます。

しかし、それよりもっと優れた方法、それはカルマの現象化しやすい空間に自分を置き、その空間の中で自

己のカルマを認識し、それを教義にのっとり捨断すると。これをなすならば、もっと素晴らしい修行法となるのです。

例えば、例を挙げましょう。ある人が街を歩いたり、あるいは喫茶店に入ったり、あるいは電車に乗ったりすると。そのとき、どこへ行っても、例えば文句を言われると。そうすると、この人は、こう考えなければならぬ。わたしは、文句を言われるカルマがあるんだと。きっとわたしは今の生において、人に多くの文句を言ったに違いないと。では、自分の言葉についてよく見極めてみよう。そして、もし、この人が自分の他人に対して文句を言うカルマを認識することができれば、それは一冊の経典を記憶するのと同等の、大いなる価値が存在するのです。なぜならば、その人は、それを捨断することにより、二度と他人から文句を言われる環境へと身を置くことがないからです。

例えば今、大乘の成就者、あるいはマハムドラーの成就者たちが、アンダーグラウンド・エアータイト・サマディ、あるいはアンダーグラウンド・サマディといった修行を行なっています。これも、まさに同じで、食事のない状態、あるいは水のない状態、あるいは酸素のない状態で、いったい自分自身の心はどうなるのかと、どのような苦しみが生起するのかと、そしてそれらを生起させることによって、自分のけがれを認識すると。そして、自分のけがれを認識し、捨断することによって、その人はいかなる環境においても苦しみがなくなる。つまり、地獄に落ちたとしても、地獄での苦しみは生じないと。これこそが、まさに大乘の修行の本質です。

そして、大乘の修行の完成をなすためには、わたしたちは四つの無量心の実践をしなければなりません。その四つの無量心とは、聖慈愛・聖哀れみ・聖称賛、そして聖無頓着です。皆さんが、この四つの無量心をしつかりと実践するならば、皆さんは偉大なる、大きな、優しい、そして柔軟な心を完成し、最高の世界へと、あるいはいかなる世界においても最高の魂となることでしょう。

モーセが二回目の結婚を行なったとき、モーセをイスラエルの民は非難しました。しかし、そこで、ヤハウェは、そのモーセを非難した人たちに大いなる病を振りかけ、降り注ぎ、そして心を悔い改めさせました。な

ぜならば、モーセほどの慈愛の持ち主が存在しなかったからです。それほど、この大乘の修行、四無量心の一つである聖慈愛だけをとっても、その心を培うことができるならば、その魂は大いに形状界、あるいは非形状界の神々の祝福を受けることとなるでしょう。

それではね、まず四無量心の瞑想、初めは聖慈愛の瞑想をいたしましょう。これは、皆さんが、皆さんの周りにいる人たち一人一人を意識し、その人たちがすべて真理と巡り合ってほしいな、そして大いに高い世界へ生まれ変わってほしいな、あるいは真の意味で苦しみから解放されてほしいな、真の意味で四つの絶対的真理、苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法を知り、理解し、記憶し、実践してほしいなと、そう考えることです。はい、それではこれから二分間、しっかりと瞑想しましょう。

はい、それでは、次は聖哀れみの瞑想をしましょう。この聖哀れみは、いまだ真理を実践していない人、あるいは真理を知っているのに実践できない人に対する大いなる哀れみです。なぜならば、真理を実践しなければ、その人たちがこの人間の世界から低級霊域つまり餓鬼の世界や、動物の発生、あるいは激苦地獄へと輪廻転生することが間違いないからです。それは、先程も述べた経験の蓄積、経験の構成を見ると、例えば殺生を喜び、偷盗を喜び、邪淫を喜び、妄語を喜び、あるいは軽薄な言葉を喜び、悪口を喜び、あるいは仲たがいをさせる言葉、中傷を喜び、心において嫌悪、つまり邪悪心、そして無智、迷妄ね、そして愛著といったものを修習することにより、それが起きるわけです。

ですから、それから完全に捨断させるための道、絶対の真理、つまり煩惱、煩惱の生起、煩惱の滅尽、煩惱の滅尽に至る方法、これを説き明かす真理、オウム真理教との縁ができてほしいなとしっかり考える。この瞑想ができるかどうか、これは大変な、重要な問題です。はい、それでは、聖哀れみの瞑想、あなたの方の周りにいる、迷妄に悩む魂に対する哀れみ、これをこれから瞑想しましょう。二分間です。

はい、これら偉大な二つの心は、わたしたちよりも真理と縁が遠い、あるいは徳がない、あるいは善の実践に乏しいと、あるいは法則の修行ができていないと、こういう対象に対する瞑想です。しかし、これらの対象に対する瞑想は、確かに下に対する縁、つまり自分より身分の低い者、徳の少ない者に対する縁はできますが、

自分よりも徳の上の者、あるいは優れた霊性や智慧の持ち主との縁はできません。

では、これらの、自分より上の者と同等になつていくための道、あるいは上の世界の魂と縁をつなぐ道、それはいったい、どういう瞑想でしょうか。どういう実践でしょうか。それは、三番目の聖称賛の瞑想です。したがって、皆さんは、自分より修行の進んでいる人、霊的に進化した人、あるいは心の成熟した人、あるいは徳の修行を実践している人、あるいは善の修行を実践している人、あるいは心の平静な人、これらの魂に対して、大いに称賛する。それは、今まであなたが生まれ、そして生きている間のいろいろな現象を思い出し、その人たちに対する称賛の心を培いましょう。はい、それでは、二分間行ないます。

わたしたちが根気、あるいは記憶の継続、記憶修習、これらを正しく実践するためには、無頓着の心構えが必要です。では、なぜ無頓着の心構えが必要なのでしょう。わたしたちが、もし、わたしは善をなしたと、あるいはわたしは徳を積んだという心が生じていたとして、今の環境が、もし、苦しい環境であるとしたならば、こう考えるはず。わたしは、これこれの徳を積んだ、これこれの善をなしたのに、なぜ、今苦しい環境でなければならぬんだと。

しかし、今、苦しんでいること、これは過去における、あるいは過去世における、自己の悪業の結果である。今、喜んでいること、今楽しいことは、過去における、あるいは過去世における善業の結果であると。これらを認識するならば、わたしたちは今の苦しみや喜びに対しては、全く頓着する必要性を感じないし、逆に頓着することそのものが、わたしたちにとって不利益になるんだということが理解できるはず。逆にしたがって、淡々と目の前にあることを一つ一つ消化すること、これこそが最高の心なのです。よって、四

無量心の最後にくる聖無頓着とは、いかなる現象に対してもこだわらないと。

例えば例を挙げるならば、昨日まで転輪聖王であった者が、自分の死期が近づくと、頭を剃り、そして出家すると。そして、托鉢修行によって生きると。これこそは、まさにその典型的な実践だと思われ。つまり、自分のいい状態にも、あるいは托鉢によって生きなければならぬ状態になつたとしても、その点、その点でベストを尽くす。これこそが無頓着なのです。

そして、最高の無頓着の心の実践は、いまだ真理と縁のない魂に対して、真理との縁を結びつけると。そして、例えば罵倒されたり、嘲笑されたりすると。あるいは、冷淡に扱われると。このような相手方の態度に対して、いっさい心を乱さないこと。そして、それは自己のカルマ落としてあると考えること。そして、黙々と努力をし続けるなら、奮闘努力を続けるなら、その修行者は北伝における大乘の四つの土台、布施・持戒・忍辱・精進をすでに確立し、そしてサマディ、智慧という在家における解脱・悟りの道を達成する準備ができたことを表わしています。

つまり、この無頓着の心、これを完成することこそ、わたしたちが在家において解脱する道なのです。それは、今まで真理施、その他のいろいろなあなた方にとって苦しみ、これを思い出しながら、それに対して、「ああ、あれはわたしにとっての試練である」と。「わたしにとっての無頓着の修行の試練だったんだ」と、それを考えましょう。これから、二分間です。

わたしたちがこれら四つの偉大な心を培うこと、これはわたしたちが、いかなる世界に転生したとしても、幸福を約束する四つの瞑想法ということができます。

では次に、わたしたちが、この人間世界を含め、地獄から意識墮落天までの五つの世界へ転生しないためには、どのような実践を行なつたらよろしいのでしょうか。

これは、下位に結びつける五つのきずな、これを完全に断ち切る。つまり、自己の内側にその要素を内在させないことです。

ではまず第一番目、地獄の要素とは何でしょうか。これは、有身謬見。つまり「我が身これ我なり」という発想です。ではなぜ、我が身これ我なのか。地獄は、何度死んでも肉体を持ち、そこで苦しみを味わわなきゃなりません。もしわたしたちが身体に対する愛着がなくなれば、たとえ地獄の要素があつたとしても、それはそのカルマの切れた瞬間、その地獄での身体に愛着しない、そういう状態になつた瞬間、わたしたちは地獄から解放されるのです。したがって、粗雑な物質、あるいは粗雑な身体に対するとらわれ、これを捨断すること、これこそが、わたしたちがまずなさなければならぬ瞑想です。

はい、それでは、これからまず一分間。しっかりとまず、この我が身これ我ではないと。つまりわたしたちの身体は父母の精液と、それから卵との結合によって形成された身体にすぎないと、そのように考え、この身体はわたしではないという瞑想をしましょう。はい一分間。——はいやめ。

わたしたちが第二番目に捨断しなければならぬこと、それは疑念です。この「疑念」とは何かというと、真理に対する疑念。例えば、善を行なったとしてもそれは利益にならないだとか、あるいは徳を積んだとしても高い世界へ行けないだとか、あるいは真理の法則を実践したとしても解脱しないだとか、あるいは寂静の修行を行なったとしてもサマディに入れないと。このような疑念——このような疑念をしっかりと捨断し、この四つの実践を行なうならば、動物界へ転生することはありません。しかし逆に、もし皆さんがね、例えば、すべては自分のためにあると。善をなすぐらいだったら、自分のエゴを満足させた方がいいと。あるいは徳を積むくらいだったら、自分のために使った方がいいと。あるいは、寂静の修行を行なうより、外側で煩惱を満たした方がいいんだと。あるいは真理の法則を実践するより、今を楽しく生きやすいじゃないかと。このような心の働きを持ち、疑念を実践するならば、必ずや動物界へと転生します。したがって、それを捨断する瞑想、疑念の捨断の瞑想——はい、それではこれから一分間行ないましょう。

そして第三番目は、戒誓のとらわれの捨断。この「戒誓のとらわれ」とは何かというと、要するに、なんらかの利益を得るために念力をかけるだとか、あるいは、なんらかの願望を成就するために念力をかけると。これが、戒誓のとらわれの「誓」だね。では、「戒」のとらわれとは何かと。例えば、何とかの目的のためにお百度参りをするとか。これが戒である。そしてこれらの、わたしたちの煩惱を増大させ、愛著を増大させるような生き方をしていると、わたしたちは低級靈域へと転生するわけです。したがって今まで宗教遍歴のある人は、その宗教遍歴に対するザンゲ、あるいはもし政治的誤った見解に立ったり、思想的誤った見解に立った人は、その思想に対するザンゲ、これを行ないましょう。はいそれでは一分間。——はい。

そしてね、素敵な異性に対する興奮、この興奮を捨断すること、そして他人を害して、あるいは、け落として、自分が優位に立とうとする心、これを捨断すること。この五つの捨断により、わたしたちは地獄から意識

墮落天までの世界への転生までを捨断し、より高い、幸福・歓喜・自由を得ることができます。したがって皆さんは四無量心、そして五つの下位に結びつけるきずな、これをしっかりと捨断しましょう。

いかなる真理勝者においても、必ず達成へ至るための蓄積、オウム真理教の言葉を借りるならば、経験の集積、経験の構成といったようなものを積み上げていかなければならない。これは『真理』に出ている、毎月の北伝、タントラ・ヴァジラヤーナ解説の中でも、その項目がいよいよ始まってきたということが出来ます。

わたしたちは、わたしたちのなしたカルマの報いを受けなければならぬ。そして、そのカルマの報いは善しにしろ悪しにしろ、必ず現象化する。例えば例を挙げるならば、一九八九年、オウムバッシングが始まって、その先陣を切った『サンデー毎日』の編集長・牧太郎氏は、去年の十二月、高血圧とそして糖尿病で倒れた。そのときの状態がまさに無智——つまり自分自身を言葉によって表現することができなくなり、半身が麻痺した。これは教義どおりであると。つまり真理に対して誹謗した者は、必ずその報いを受けなければならぬ。それは、真理に対する誹謗は、信徒であるならばわかつて、当然、疑念・無智というスヴァディスターナ・チャクラとの関係により、現象としても思考が弱まるとか、あるいは知能が低下するといったような現象が起きると。そして、彼の場合も同じように大脳に大きなダメージを受け、そのような現象が起きた。

これは、国土法違反の関係で、オウム真理教を弾圧した検事数名も同じように心臓の病にかかったり、あるいは、先程述べた脳の病にかかったりしていると。これから見てもわかるとおり、悪業は必ず悪果として現象化すると。逆にわたしたちの積む善業は必ず善果として現象化すると。したがって、わたしたちは善業を積み続けるべきであるというのが仏教の理論である。

もともと、わたしたちが天界へ至るためには、風の制御により、あるいは経験の構成を強めることにより至ることができる。オウム真理教の救済もいよいよ意識墮落天、そしてナーガ、ガンダッパ、クンバンダ、ヤッカといった、第一天界の要素に対して一つ一つ救済計画は進んでいる。

まず第一番目の意識墮落天の要素としては、經典の整理、および正しい經典の出版と。これは意識墮落天が論理・科学といったものを、基本として見るところから見ても、この救済計画は進行していることは間違いない。

いと。

第二番目の例えばナーガについては、これは皆さんもご存じのとおり、長きにわたり巨大な護摩壇を組み、そして天界の神々を供養し、それによって気候が変動するまでになった。これはナーガの供養法の儀式が一通り成功したことを表わしている。

ガンダッパの供養法については、これは神々の音楽をできるだけ多くの人に聴かせると。例えばモスクワから放送されている電波のエリアといったら、ね、皆さんも知ってのとおり、モスクワからこの日本、あるいは全世界への英語放送と。そしていよいよ九月から、まず旧ソ連邦二億二千万人に対して、毎日五十五分の放送がスタートしていると。これはすべてガンダッパのカルマであると。

で、次にクンバンダ、成長天はどうかと。これについては生命を維持させる働きがあるわけで、十月の中旬以降、まず第一回目のアフリカ救済ツアーを考えています。このアフリカ救済ツアーは、もちろん一般の信徒の方々の参加ではなく、出家したわたしの弟子の医師の一部と、そして在家のドクターの方々、あるいは看護婦の方々を連れてアフリカの飢饉と、そして、難病というか、死の病で苦しんでいらっしゃる方々に対して救済の手を差し伸べたいというのが狙いであると。

ではヤッカ、人食い鬼神はどうかという。これは皆さんも知ってのとおり、今年の二月にスタートしたロシア救済——まロシアそのものはまさに低級霊域であるから、これを救済することは人食い鬼神として必要なことであった。

つまり、この第一天界の要素、これを完璧に達成した後、有能神の座へ座ることになると。

ではなぜ、有能神の座へ座る必要があるのかという問題があると。それはこの地上が救世主によって完全に煩惱から解放され、そして地上楽園の時代が来ると予言されているからであると。そしてそれをなすのが有能神の座に座った者ということになる。

皆さんの中で、毎週毎週「ノストラダムス秘密の予言」を聴いている人がいるならばわかるかもしれないが、一つ一つ予言詩は解説され、そして、次の週で放送される内容は、救世主は登場すると、しかし教団は初

め大きくならないと予言されている。そして長い時を経て後、すべての魂は解放されると、これは要約だね。で、なぜそれが必要なかという、それはその間に救世主はいろいろな要素、これを完全に具足すると。つまり、具足するまでは大きくならないんだというのが予言詩の内容なんだよ。

つまり、単純に教団が大きくなり発展するのではなく、救世主と、それから救世主のもとに集う者たちがしっかりと真理の実践を行ない、自分たちの善行・徳行・法則の実践・寂静の実践といったものをしっかりと行ない、そして、それによりステージを上げて初めて解放されると。もちろんそれはそうであると。なぜならば、いくら素晴らしい法則があったとしても、それがもし、ただ単に論理しかなく、それを体現した人たちがいないとするならば、その世界を地上楽園といえるだろうかという疑問がある。

では、地上楽園はどのような形で形成されるのかという問題がある。これは今の経済的な困窮状態、ま、皆さんも知ってのとおり完璧な不況の状態であるわけだが、これはおそらく世界のモラルが変化するまで続くと思われるべきである。つまり日本の場合、九七年から二〇〇〇年、これぐらいに逆転現象が起きるはずである。そして、その時代に生き残った人たちは、いいですか、大変豊かな経済的な土台が確立するはずである。

しかし、この大変豊かな経済的土台というのは何を意味するのかというと、それは他の衆生に対して利すだけの、つまり利益を与えるだけのゆとりが与えられると見るべきである。つまり、豊かな者は貧しい者に対して恵みを垂れるという原則的な実践が行なわれてこそ、本当の意味での地上楽園は成立する。

君たちも知ってのとおり、わたしの予言——九三年再軍備だといっている——もうすでに軍備の前兆は始まっている。例えばPKO法案の成立とそして軍艦マーチを奏でて広島から出艦する海上自衛隊と、これはもう過ぎ去ったことだね。そして日本とアメリカの経済摩擦の悪化と、そして不景気と。そして選挙についていうならば、自民党の大勝大敗の繰り返しと。これはわたしが一九八〇年代の後半に予言した内容だが、すべて成就している。そして次の日本のターニングポイントは一九九六年、七年、八年であると。ここで日本は大きな変化を遂げるはずである。この大きな変化は進化になるのか、あるいは逆に滅亡に至るのか、それはここにいる一人一人の皆さんがしっかりと修行し、そして神々の意識状態を形成するかどうかで決まるだろう。

ま、そういう一見突飛と思われる話は別にして、わたしたちがなさなければならないこと、それは真理の実践である。いかに素晴らしい法則がそこに存在していたとしても、その法則をもし実践しなければ、わたしたちは何の恩恵も得ることができないのである。

皆さんは、オウム真理教が世間から恐怖される理由を知っているかな、本当の意味の。それは光であるということができる。これは皆さん自身が瞑想体験を続けていけばよくわかることだが、光がまばゆく射した場合、それに対して恐怖すると。つまり、わたしたちの経験の構成、日々培っている徳とそれから善の量というのは、大したことはない。逆にわたしたちが日々培っている不善・不徳は多いと。そして光が強まるということは何を表わすのかというと、その不善・不徳が現象化するんだということを認識する必要がある。

そして、この不徳・不善が現象化すると、当然わたしたちは苦しみを経験しなければならない。よって光が強まるということは、不徳・不善の者にとっては、苦しいことなのである。しかし逆に、もし善・徳の実践を行なっている人はどうだろうか。これは光が強まることによって、徳・善の現象化がはっきりと現われるから、喜ばれなければならないことであると。したがって皆さんは真理の実践を、真理の法則の実践をしつかり行なうべきである。

ところで、真理には二段階の真理がある。それは「タター」と呼ばれるものと、それから「サッチャ」と呼ばれるものである。タターとは何かというと、相対的な真理、例えばこの人間界における真理だとか、あるいは天界における真理だとかいわれるパートである。サッチャとは、そのようなものをすべて超越した絶対の真理を表わす。

では、タターを別の言い方をすれば何だと、これは方便であるといわれている。そして方便を完全に成就すること、これこそがタターガタ、真理勝者になる道である。では、方便とは何だと。それは現象を正確に見つめ、そしてそれを理解する力。あるいはそれを表現する力ということが出来るだろう。そしてそれを体得した者、これが真理勝者なのである。

例えば例を挙げよう。ある人がここにいて、その人が人間から解脱したいと考えたと。その場合、いろいろ

な経典を読みあさり、解脱という項目を徹底的にチェックし、そして修行に入ると。こういうプロセスが一つあると。逆に、人間の要素を一つ一つ分析し、そして最終的に人間に生まれ変わる理由というのは愛欲の興奮であるということに行き着くと。そして、その愛欲の興奮を捨断する瞑想に入ると。この前者と後者とは結果が違ってくる。つまり前者は学者的なアプローチであり、後者は真理勝者のとるアプローチであると。

この後者に行き着くためには、人間の要素を徹底的に分析すれば、つまり人間の欲求の要素を徹底的に分析すれば理解できるはずだし、また逆に、解脱という意味の深い意味を理解すれば理解できるはずである。解脱という意味は、一般社会においては、離れる脱するという否定的な考え方である。

逆に今度は具足という点を考えてみよう。ある人がここにおいて、わたしは天界に至るための条件を具足したいと考えたと。同じように経典を読みあさり、天界の要素といわれるものを記憶し実践すると。これも一つの道である。しかし逆に、人間より喜びの多い状況は何であろうと検討し、それを具足すると。例えば、争いのない世界であろうと考えると、ということはわたしはここから争いを捨てるならば天界に至る条件を身につけることができるはずであるといつて実践すると。例えば、喜びの多い空間こそ天界であると考えたと。だとするならば、すべてはカルマの法則により、喜びは与えたもののしか返ってこないわけだから、わたしは大いに縁ある人たちに喜びを与えようといつて、喜びを与える実践を行なうと。このような形で自分の考える天界、その要素をしっかりと記憶し、そして、その因を構成していくと。もちろん後者の方が賢いやり方であると。そして、これがタター、相対の真理なのである。

では絶対の真理というのは何かと。それはいかに愛する対象があったとしても、その愛する対象とは死というものを境に別れなければならないと。あるいは憎むべき対象と一緒にいることはつらいと。あるいは感覚器官の発達は、喜びと同時に苦しみを増大させると。こういう要素からの完全なる捨断、あるいはそういう要素の全くない、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の状態へ至る道、これがサッチャ、絶対の真理ということになる。そして、まずタターの実践から最終的なサッチャの理解、そして実践へと移行するのである。したがって皆さんが真理をしっかりと学び、そして実践することは、より多くの真理を知り、そしてより高い真理を実践でき

ることとなるということが出来るだろう。

人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられない。しかし、わたしたちはその死を超越する道を知っている。したがって日々の善・徳・寂靜・法則の修行をしっかりと頑張っていたいただきたいものである。

今から四日前、アストラル世界において、放射能を浴びるヴィジョンを見た。これは九七年から二〇〇一年にかけて必ず起きるであろう核戦争の疑似体験であると考えている。そのとき、わたしの状態は端から見何の変化もない。しかし、自分自身では明らかに放射能の影響を受けているという体験であった。周りに数名の弟子たちがいて、数名の弟子たちは一部ただれが起きていたりといった状態があった。間違はなく、最終戦争と呼ばれる戦争は起きると。しかも、それは九七年から二〇〇一年の間に必ず起きると。戦争のポイントはどこか。それは中東である。そして前回行なわれた湾岸戦争は、その模擬戦争であると考えべきである。

ところで、これらの戦争、あるいはこれから起きるいろいろな破局に対して、わたしたちはどのように考えればいいのか。まずわたしが過去においてなした、はつきりと述べた予言、このほとんどは的中し、円が一ドル百円台になるという予言だけがまだ成就していない。しかし、一九九二年の段階ですでにPKO法案は成立し、再軍備ともいえる外国への出兵がなされた。そして、これらの現象に対して、わたしたちは次のことを考えるべきである。

まず自分自身の死、これを直視するべきである。つまり、たとえ第三次世界大戦が起きようと起きまいと、ということをおぼろげに以前から言っていたわけだが、まあ起きるとして、死ぬ確率はかなり高い。起きないとしてもいざ死ねと。この二つの条件を考えるならば、死を直視し、そして死の後、どのような形でわたしたちが輪廻転生を行なえばいいのかについて検討に入り、努力する時期がやってきた。そして、死の準備のためには数週間や数時間ではなかなか間に合わない。自分自身の本当に決定的な輪廻転生を考えるならば、それは明らかに今から準備をするべきである。

では、そのためには、どのような方法があるだろうか。それは、まずしっかりと真理の法則が、現世のデータに負けず実践できるように、「決意」、あるいは「欲如意足」といわれるものを徹底的に行ない、そして自己の欲求、これを捨断し、そして正しい生き方、正しい方向に向かって努力できる加速度をつけるためのデータ

の入れ替えを行なうべきであると。

次に自分自身の身・口・意、つまり、身の行ない・言葉・心の働きの三つが来世を決定するわけだから、その一つ一つを検討し、そして来世の要素、つまり来世自分自身を形成する心の要素である「意」、アストラルの要素である「口」、身体・要素である「身」の行為、これを浄化し、積み上げていく努力が必要である。

これらをなし続けるならば、いかなる現象が起きたとしても、あなた方は救済されることは間違いない。

もう一つの方法は大乘の考え方である。これは自分自身が早く速やかに第三段階のマハムドラーの達成を行ない、そして清らかな受け皿としての、つまり煩惱を滅尽した状態での身体・言葉・心を完成させ、その後高い次元の神々を身に宿すという方法である。これは、例えば神聖世界、あるいは光音天の世界、あるいは総美天の世界、あるいは色究竟天の神々がもしこの人間界へ何神となく降りるとするならば、それによってこの現象界のサットヴァ度は高まり、そしてカルマの清算もなされるだろうが、その後の新しい世界の登場も速やかに起こるはずである。

しかし、このためには先程述べた第一の条件の最終段階ともいえる供養値魂にまずなすべきである。そして、その後受け皿としての決定を行なうべきである。この話は大乘論の中でも最も難しい部類に属するから、新しい信徒もたくさんいるだろうから理解できないところがあるかもしれない。

では、次にこの大乘論、あるいは小乗論、この二つの背景をバックボーンとして、いったいどのような未来構造、未来の新しい世界が約束されているといえるのだろうか。それは一言でいうならば自由、一言でいうならば平等、一言でいうならば豊か、このようなものが総合された社会であると考えべきである。

では、その自由、そして平等、豊かさの背景にあるものは何だろうか。それは、個々の意識の覚醒であるということができる。例えば、ここにある会社があったとして、そこでの会社は、会社の給料は大変高い。しかし、そこで勤めている人たちはそれぞれが煩惱を滅尽し、そして高い給料の必要な分だけを取り、あとはすべての衆生のために布施をするとするならば、給料の高さにより豊かさは約束され、そしてその余りによって、つまり布施によって逆に徳のない魂も含めて平等な社会が形成されるはずである。そして、それに対する

いつさいの束縛のない自由というものが約束される。このような社会的セオリーを土台とし、そして、次のステップへと入っていくと。

次のステップとは何かというと、それは来世と今生、あるいはアストラルと現象界のつながる社会であるといふことができる。これは何を意味するのかというと、霊性の高い者たちが集団を形成するようになると、現実のこの肉体の世界だけではなく、変化身の世界と、そしてこの現象の世界とがオーバーラップされた形で見えたり聞こえたり感じたりすることができるようになる。

この現象界でのカルマの生起と、それからカルマの滅尽との繰り返しのスピードは大変遅いと。そしてその他にいろいろなカルマの要素が複合的に形成されるから、大変わかりづらいといふことができる。しかし、アストラル世界がそこに関連してくると、関与してくると、アストラルでのカルマの返りはより速く、コーザルに至ると瞬時にカルマの原因とそして結果といふものが理解できるのである。

これらのカルマの法則の理解は、すべての魂を善の方向に向け、徳を積む方向に向け、そして寂靜を實踐する方向へと向かうと。なぜならば、わたしたちの身の行為、言葉の働き、心の働き等の結果が理解できないがゆえに、つまり無智なるがゆえに、わたしたちはカルマの法則の現象を理解することができないのである。

したがって、このような新しい時代の登場を達成するためには、個々の霊性が向上し、今のクンダリーニ・ヨーガのレベルが、例えばマハムドラーのレベルに到達し、そしてマハムドラーのレベルが大乘のヨーガ、大乘のヨーガのレベルが報身のヨーガ、報身のヨーガのレベルがコーザルのヨーガ、コーザルのヨーガのレベルが最終解脱に移行する。このような状態でサットヴァの光が強まった段階で、初めて起きる世界なのである。

そして、これらを出現するもの、この世に現わす者こそ救世主であるといふことができる。例えば今から約二千年前、イエス・キリストと呼ばれる救世主の一人が登場した。彼はわずか十数人の弟子の前において、いろんな予言をなしたり、あるいはいろんな現象を見せることによって、その世界を信じさせ、そして真理のメッセンジャーとして自分の死ぬ前の弟子十二人を選んだといわれている。

しかし、彼がその世界の様子、つまりアストラルの様子やあるいはコーザルの様子や、あるいはいろいろな

神秘的な要素をこの世に表わしたのはたった十二名の前であるといふことができる。もちろん在家の一般の信徒の前で病気を治したり、いったん死んだ人間の息を吹き返らせたり、いろんな奇跡を行なっていることは事実である。しかし、そのようなものは他の呪術的方法でも、たまに成功するという例があることによって、すべての人たちはイエス・キリストを救世主として信じなかった。

そして、このキリストクラスの成就者は、インドやチベット、あるいはブータン、あるいはネパール等、あるいはタイ等にね、多く出現したと。そしてそれは仏教という形をとり、あるいは密教という形をとり、あるいはヨーガという形をとり展開したと。

しかし、先程述べた世界全体をサットヴァの光で包む救世主は登場しなかったと。もともとその救世主の役割というものは、世界に真理の法則をのべ伝えさせ、そしてサットヴァの光を強めさせることにより、すべての魂に未来際において真理を實踐させ、すべての魂を偉大なる最終の煩惱破壊の世界であるマハー・ボーディ・ニルヴァーナへといざなうことが役割なのである。そして、この偉大なる未来の素晴らしい世界が現出するか否かは救世主の力だけにかかっているわけではなく、それを信奉する者、つまり信徒、あるいはそれにつき従う者、つまり弟子の努力にかかっているといふことができる。

人は必ず死ぬ。そして、その前提をもとに、その死後・来世をいかに幸福にするか。あるいは、いかに来世の前兆を今生で現象化するかといふことが救世主の役割なのである。つまり、ある宗教が「あなたは来世天界へ行きますよ」と言ったとしよう。しかし、その前兆はガンにかかり、苦しみ、食べたくても食べられない状態で死んでいったとしよう。この状態で果たして来世天界へ行けるだろうか。これは決して行けないと。なぜならば身の行為の現象を分析すると、それは低級霊域、つまり餓鬼の世界へと至る前兆が現われているからである。

例えば老人性の痴呆症ちほうしょうになり、そして死んでいったとしよう。この状態で果たして来世天界へ行けるだろうか。当然これは行けないと。それは無智が成就しているわけだから、来世は動物の世界へと転生するわけである。例えば、身体があちこち痛み、苦しんでいる状態で死んだとしよう。この状態で来世天界へ行けるだ

救済には、近視的、遠視的、あるいは通常の三つのパターンの救済が存在します。

まず、近視的救済と呼ばれるものは、わたしたちが、この現実の世界に存在しながら幸福であるというポイントをもとに行なわれる救済です。例えば素晴らしい結婚をするとか、あるいはいい大学に入るとか、あるいは実際問題としていい就職を行なうとか、まあこういうものを近視的救済ということができるとしよう。

通常の救済とは何かというと、これは一般的に、例えば南伝仏教や北伝仏教、あるいは他のキリスト教やイスラム教等でも行なわれているように、来世というものを規定し、そして来世のために幸福に至る道を説くという教えです。

そして遠視的救済とは何かというと、人間が最終的に本質的に自由・幸福・歓喜の道を得る世界へと到達させるということとなるでしょう。

ここにいらつしやる皆さんは、この三つのパートのどれかに属する願望をお持ちだと思っています。この願望を達成する方法は、同じように三つの方向から攻めることができるということが出来ます。それは、個人個人が、まず、一般にいわれている道徳的な善行や、あるいは徳の修行を行なうことにより、幸福を得ようとする道と。そして、第二番目は、これは最高の法則、ハイエスト・ダンマに属するわけですが、自分自身の持っているエネルギーのコントロールを行なうことにより、超人的な思考状態、超人的な瞑想状態を得るという方法。そして第三番目は、これらを合わせた方法の三つということが出来ます。

この三つは、それぞれ、時間の経過に伴い、違った形の結果をわたしたちにもたらします。

例えば、第一の、善行や徳行の結果は、わたしたちがあまりいろいろなことを願望せずとも、今の人生を幸福へと至らせますし、あるいは逆に二番目のエネルギーのコントロールについては、エネルギーを上昇させたときには、自分の願望がかない、あまりこれは善行や徳行を行なわなくても、自分自身の願望をかなえるといった現象が起き、逆にエネルギーが落下したときには不幸の状態を経験します。そして、一、二を併せ持った場

合、最も高い、精神的・霊的な経験をする事ができます。

とはいえ、例えばここに集まっていらつしやる皆さんは、このような話について、あまり興味を持たれないかもしれない。しかし、この話に興味を持つ、持たないにかかわらず、今日わたしが話す中心的な命題である、これからの日本の未来と、そして世界の未来について、わたしの得た瞑想からの経験、および過去の偉大な成就者たちの経験をお聞きになるならば、おそらく背筋に冷たいものを感じざるにはおられないでしょう。

例えばわたしたちは、明日、交通事故に遭うかもしれない。あるいは、これから一カ月後、二カ月後、重たい病にかかり、それで亡くなるかもしれない。しかしそれはあくまでも個人的な苦しみの範疇であって、「死」というものを当然と受けとめているわたしたちの意識にとって、それほど重たい負担でないということがいえます。しかし、もし大量の「死」、これがわたしたちの周りで起きるとしたら、皆さんはどう考えるでしょうか。

これから二〇〇〇年にかけて起きる現象は、筆舌に尽くし難いような、激しい、しかも恐怖に満ちた現象が連続的に起きると考えるべきであるというのがわたしの立場です。

では、どのような現象が起きるのかと。これは例えば、ノストラダムスの予言詩の一つを紹介するならばよく理解できると思われませんが、この日本の国土が荒れた大地と変わると。では何によって変わるのかと。これは考えられることは、核である。ではその時期はいつだと。それは九六年から九八年の一月までの間に起きると。ではどのような形でどこが攻めるのかと。それはアメリカを中心とした連合国であると。

しかし今実際、日本とアメリカは、国際的には、本当に「真の友」と呼ばれるように深い関係ではないかと。わたしは一九八〇年代に、いくつかの予言をしました。その中で、まだ現象化していないものが一つあります。それはドルが一〇〇円になるということ。それ以外の予言はすべて成就しています。

例えば、近ごろ予言した内容で的中した例を挙げると、日本の天皇が「元首」になると。これは今年の九月に、ラジオを通じて放送されています。しかし、実際問題として、それが成就したのは、なんと十月であると。しかもそれは、NHKが、中国の元首、そして日本の元首という形で表現し、それを『朝日新聞』が叩いたと

いう実際の内容があると。しかしこの内容は、別に私が予言したわけではなく、ノストラダムスの予言詩の一つにすぎない。

では、わたしたちにとって、これからこのような激しい現象に対して、どのようなアプローチをする必要があるのか。

もともと人間は、二つのカテゴリーに分けることができる。その第一のカテゴリーは、情報に流され、そしてその情報が与える喜びと苦しみを経験しながら、ちょうど暴流、荒れ狂う流れに流されるような人生を送る生き方。もう一つは、情報をいっさいカットし、自分の生き方をしっかり確定させ、そしてしっかり生きるという生き方の二つである。

そして瞬間瞬間の喜びを求めている、この中のある程度の人たちは、この前者に属し、そうではなく、本質的な自分自身の喜びや自由や歓喜を求めている人たちは後者に属するということができるでしょう。そしてこの後者に到達するならば、自分自身がたといいつ死を迎えようとも、幸福な人生を歩くことができる。

ではいったい、どの程度の人が、この地上のね、その二〇〇〇年までに死ぬだろうかという問題に入るならば、自分自身の死の確率がだいたい算定できると。まあ、わたしの精神的力によって見た経験と、それからいろいろな過去の予言者たちの話を総合すると、大都会においては十分の一くらいの人口しか残らないというのが今のわたしの立場です。つまり十人中九人は死んでしまうと。つまりここにいるあなた方も、大阪という大都市に生活しているわけですから、ここにいらっしゃる九割の人は二〇〇〇年までの寿命はないと見るべきだろう。

しかし、これだけわたしがダイナミックな発言をしたのは、まあ今回が初めてだけれども、わたし自体の内的な確信と、それから例えばノストラダムス、あるいは仏教の、『転輪獅子吼経』と呼ばれる経典、あるいはキリストの予言、『ヨハネの黙示録』等の研究の結果、どうしてもこのパーセンテージは譲ることができないという確信を得たからであると。

ということは、自分自身はその十分の一で生き残る確率に身を委ねるのか、それとも十分の九の死ぬ確率の

方に考えるのかという問題が次は生じます。

もちろん、楽観的思考、それから、今までも生きてきたんだからこれからも生きられるだろうと考える思考、この両方を検討するならば、おそらくあなた方は、十人の中の一人に自分は入ると考えるかもしれない。しかし、現実問題として、現象というのはそれほど甘くなく、確率は確率としてはっきりと九〇パーセントの者をこの世から抹殺するという結果になることは間違いないでしょう。

ではそのときに、どのような心の状態であれば幸福になるのか、あるいは、どのような心の状態であれば不幸になるのかについて検討する必要がある。

これは、密教にしろ、仏教にしろ、あるいはキリスト教にしろ、一つのことを規定しています。それは、今あなた方が今生で培った要素の蓄積、つまり経験の総集編的な意識が次の生を決定するんだと。だから例えば、憎しみや、あるいは妬みや、あるいはそねみや、あるいは害心といったような、けがれた心を持つ場合、その対象が、死の瞬間に現われ、それに対する憎しみとともに地獄へ至ると。これが密教あるいは仏教の見解である。あるいは逆に肉体から離れた瞬間、例えば今まで修習した、つまり記憶を修習した意識が神を思念することにより天界へと至ると。

要するに、死の瞬間に、そこまで心の準備をしているとするならば、あなた方は救済された魂、つまりこれは普通に救済された魂ということができよう。

では、オウム真理教そのものは、いったい何を考えているのか。これは本格的にわたしたちは水中市というものを考えています。ではその水中市とはどういうものかというところ、ある程度の人数——まあ十万人になるか百万人になるかわかりませんが——要するに核が爆発し、その核の放射能を水により吸収すると。そしてそれだけではなくガンマ線等をね、しっかりその水で吸収し、そして鉄板の厚みがどの程度だったら防御できるだろうかというような検討に実際に入っています。

これはまあ今、わたしたちの予算では、一千億円以上は自前で作ってもかかるだろうという数字が出ているわけけれども、これは具体的に、いよいよ迫り来た世紀末に対しての準備をしっかりと怠らないようにしな

いと、苦しむのは自分自身であるという立場に立っているからです。

あなた方もあなたの方の立場で、自分の未来をしっかりと見つめ、そして自分を防御する道をしっかりと検討していただきたいというのが、わたしがこの大阪大学へ来てのね、あなた方に対するメッセージです。

人間は、必ず死にます。そういう意味においては核で亡くなろうと、あるいは生物兵器で亡くなろうと、あるいはケミカルな化学兵器で亡くなろうと、あるいは交通事故で亡くなろうと、寿命で亡くなろうと、そういうものは大した問題ではない。

しかし、死の準備をする前に来る死、あるいは苦しみを周りに見ながら、自分自身が死んでいかなければならない死というものは、また格別に苦しいものではないかとわたしは考えます。

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。もともとわかっているこの命題に対して答えを出すことこそ、最高の生き方ではないか、そう考えるのです。

今日の話はね、概論的な話になりましたが、少なくとも最後に申し上げておきたいことは、これから二〇〇〇年にかけて大変な変動が起きると。その心の準備をあなた方一人一人にやってほしいな、というのが今日のわたしの話の中心であったとお考えください。

で、最後に皆さんにお話ししておきたいことは、わたしは近ごろ、完全なる「日本亡国論者」になっています。

その理由というのは、日本はもともと資源のない国です。この資源のない状態で、もしわたしたちが勤勉さと、そして他の国民より優れた智性というものを取り除かれたら、いったい何が残るんだろうかということについて皆さん考えていただきたい。

つまり皆さんは、今学生であり、十分に考える時間を与えられています。そして今の世の中の流れが進行した場合、例えば皆さんもご存じのとおり、労働力は台湾、香港、中国あるいはシンガポールといった国々に委譲されていっていると。そして、この段階で次に考える力のない若者がどんどん増えた場合、いったい国はどのような形で利益を上げることができるんだろうかと。もし利益を上げることができなければ、わたしたちは、

初めに手をもぎ取られ、足をもぎ取られ、そしてしまいには頭をもぎ取られた国民になってしまうと。その場合、わたしたちの経済的な苦しみというものは、それは悲惨なものでしょう。

わたしは多くの外国、特に貧しい国を回りましたが、その国においていえることは、先程も述べたとおり、「少なくとも知的にもっと向上させてあげられたら、この国は豊かになるのにな」という慈愛の気持ちでした。したがって皆さんは、今、恵まれたこの学生の環境を活かして、そして未来の日本をしょって立てるような一人一人になっていただきたいと思えます。そして先程も述べた、二〇〇〇年までにいろいろな社会的変動が起きるでしょうが、それに負けずに頑張ってください。

それでは、どうもありがとうございました。

今回の演題は「大予言セミナー」ということです。皆さんにはこれから、この日本に何が起こるのか、そして世界に何が起こるのか、そしてそのときにどのようにすればいいのかについてのお話をしたいと思います。

間もなく、一九九三年になります。で、これからの日本は、大きな二つの洗礼を受けることが予言されています。その一つは、水による洗礼です。これは、洪水を中心とした、要するに天変地異であると。そしてもう一つは、わたしたちの最も嫌な、戦争による災禍と。

では、この日本が本当に戦争による災禍に巻き込まれたり、あるいは水による洗礼を受けたりするか。つまり洪水に巻き込まれたりするのかわからない問題について、検討しなければならぬ。そしてそのとき、果たしてどの程度の人が亡くなり、自分自身はその生きる人に属するのかわからないについて、検討しなければならぬ。

まず大都市部、都市部、あるいは小さな街とあるわけですが、この十分の九の人は、ほとんど亡くなるだろうと。つまり、九〇パーセント程度の人は、まあ死ぬだろうというのがわたしの今の見解です。

わたしは一九八〇年代にいくつかの予言を行ないましたが、そのほとんどは、そのとおりの中しています。外れているものというはまだ成就していないものが、円がね、一ドル一〇〇円になるということを除いて、例えば日本の今の自衛隊が再軍備、つまり軍隊化されると。これはもうすでに、一九九二年に、あなた方も知つてのとおりPKO法案の成立、そして実際問題として外国への出兵といったかたちになっていると。これは九三年と言っていますから、まあ九二年より九三年の方がより外国に対して、積極的な出兵を行なうことになるでしょう。

次に、日米の経済摩擦。これはまあ今回、自由党(※民主党)のクリントン氏が大統領になった結果として九二年に激化、そして九三年に本格的な、というか最終的な貿易摩擦の激化が起きることになっていま

すが、これについても確実に成就するでしょう。

それから、これは、時代的には、わたしの予言の方が遅れたわけですが、ロシアの崩壊と。つまりソビエト連邦の崩壊と。これは二〇〇〇年の頭に来ると考えていたのが、それよりも約十年早く訪れたと。そして、東西ドイツの統合と。

まあこういう予言をするときに、わたしは、半分、疑心暗鬼になりながら、予言していたと。というのは、果たして本当に東西ドイツが統合されるのだろうか、あるいは、ヨーロッパが統合されるのだろうか、ということに対して疑問があったからです。しかし、これらの予言はすべて成就しました。

そしてその予言の確率からいくと、間違いなく一九九〇年代は、あなた方があまり望んでいない方向へと国家は変わるであろうと。つまり、一時的な大きな波乱が起きる、あるいはカタストロフィーが起きると見るべきです。

世界的にいうならば、今力を有しているアメリカの権限がなくなりだすのが、一九九八年の二月からであると。そして、二〇〇〇年には完全に、世界の盟主としてのアメリカは力をなくしてしまっている。

まあこれは確かに、今回、民主党のリーダーであるクリントンを選んだアメリカ人の心の背景には、貿易赤字、弱いアメリカ等の意識を打破したいと考える心の働きが動いたというふうに説明されていますから、この予言はまんざら成就しないということはないだろうと考えます。

では、これらの暗い予言だけなのかというと、そうではない。二〇〇〇年を、つまり新しい世紀をしょって立つのは明らかに日本であるとノストラダムスは予言しています。あるいはイエス・キリストも、東から来る「真理の御魂」が次の救世主であると予言しています。そして予言では、その救世主、キリストのもとで世界が平安な状態で統治されることが予言されています。

しかし、わたしたちはその前に、今述べた、自分自身が生き延びること、そして、できるだけ多くの人を生き延びさせ、正しい生き方を浸透させることの努力に努めなければなりません。

では、もう少し具体的に年代を追って考えてみましょう。今、わたしの一日のうちのほとんどは、ノストラ

ダムスの予言詩の解説に費やされています。それはノストラダムスの予言詩が、一九〇〇年代のすべてにわたって、完全な形で予言しているからです。そしてこれは、『ヨハネの黙示録』と合わせて見るならば、はっきりと過去の現象が理解でき、そして、未来の現象が理解できます。

それによるともうすでに来年、九三年から、大きな変動が始まると。それは、日本が先程も述べた軍事力を有するようになることをきっかけとして始まると予言されています。

そして完全に、日本は、九七年には新しい時代が始まっていると予言されています。ということは、九三、九四、九五、九六のこの四年間で、わたしたちは大きな試練を受けなければならないのです。

ノストラダムスの予言の中で、今の天皇陛下が、天皇という「象徴」から「元首」に変わることが予言されています。そしてそれは、一九九二年、つまり今年の十月、中国への訪中の際、NHKが天皇を日本の元首として紹介したこと、それを『朝日新聞』が叩いたこと——まあこれはね、新聞テレビ等に詳しいあなたがたは、わたしよりも詳しいかもしれない——等の予言の中を見えています。

これからわかるとおり、わたしたちは、この九三年から九七年にかけて、慎重に生き延びる必要があると。では、この日本のカルマはどうなるのかというと、ノストラダムスは別の詩で、「六人の免れた者」、つまり「罪から免れた者」、つまりオウム真理教の言葉を使うならば、「最終解脱者」の登場によって罪は隠される、つまり、他の国に比べて、先程述べた九〇％ぐらいの人が亡くなるとしても、それでも平安な移行を行なうんだと予言しています。

では、もし六人の最終解脱者が出なかったらどうなるのかと。これは第二次世界大戦の最後の様相、つまり、例えば広島や長崎への原爆の投下、あるいは東京大空襲、あるいは、まあ沖縄の全滅状態、あるいは大阪、神戸の空襲といういろいろありますが、これらの現象の復活、つまり日本の壊滅的な状態と見ることができるといふ。

しかしわたしの、このような予言の内容は、今のあなたの方にとって、全く根も葉もないことであるように映るかもしれない。まあ、もともと予言というものは、それを信じるか、あるいは信じないかによって、すべて

は決まります。その典型的な例が、「ノアの方舟」でもよく理解できるはずで。

ではこれらの問題について、どのようなアプローチがあるのかという点について、これからお話をしましょう。

まず具体的に、例えば集団的な防衛としては、オウム真理教自体は建物だけでも、約一千億ぐらいを投入し、近い将来、水大都市とかね、これはあの、例えば核が爆発した際のガンマ線の吸収、あるいは他の放射性物質を吸収するための鉛の壁、あるいは熱に対する対応等を検討した上での、水大都市の建設ができるような準備を始めたいと考えています。これはわたし自身が、今回起きるであろうカタストロフィー、つまり破局的な状態は必ず来るものであると考えているからです。

そして、個人的にはどのようなにしたいのか。個人的には、もし、そういう状況に陥りえない場合は、できるだけ高い世界へ至る必要があると。そして高い世界へ至るためには、何をなしたらいいのかと。それは、瞑想に熟達することであると。

そして日々の生活において、しっかりと戒律を守ることであると。戒律とは、不殺生——生き物を殺さない、不偷盗——盗みをしない、不邪淫——愛のないセックスをしない、嘘をつかない、軽薄な言葉を話さない、人を中傷しない、悪口を言わない、等の戒律であると。そしてまあ特殊な瞑想をすることであると。で、この、特殊な瞑想についてはね、今日ここに集まっている皆さんに、わたしの弟子たちが、これから指導を行ないます。したがって、皆さんは、今日わたしから伝授されるこの瞑想をしっかりと行なってください。

今日の話の中心は、皆さんにとって大変利益のある、これから、つまり未来に起きること、そしてまずはその未来に起きることについての実証の証明と。そして、それに対してどのようなアプローチが最高のものであり、それはどのように科学的に証明されるのかについて、お話をしたいと思います。

したがって、あまり未来を信じない人にとってはちょっとうさんくさい話になるかもしれませんが。しかしその背景にあるものが、絶対の真理、つまり仏教やキリスト教の内容における基本的、かつ最高の教えであることは、皆さんがこの話をお聞きになるうちに理解できるはずです。

わたしは、ある意味で大変危険な立場を絶えず取り続けている宗教家であるということが出来ます。それはどういうことかという、例えば一九八五年の講話集、これは『イニシエーション』という形で出版されたわけですが、ここで、九〇年に何が起きるか、九三年に何が起きるかという、大変近未来の予言をしました。また、一九八七年に執筆を始めた『滅亡の日』、『滅亡から虚空へ』では、これも同じように九〇年代の前半、あるいは後半、二〇〇〇年代の頭に何が起きるかという予言をしました。なぜ大変危険な立場を絶えず取り続けながら生きている宗教家であるといっているかという、つまり予言が外れるということは、致命的なダメージを宗教家として受けるからです。

もともと予言というものは、曖昧にかつ象徴的な表現をするならば、一般の人たちには納得させることが出来ます。そして外れた場合それに対して適当な言い訳をなす、これをなすならば、まあ宗教家として生きていけないことではないでしょう。しかし今の日本に本当に必要なものは、正しい未来予測と、そしてそれに対してどのようになさなければならぬのかということである、ということが出来るのです。

一九八五年の『イニシエーション』の予言においては、まだ成就していないものが一つあります。それは、円が一ドル百円になるという予言です。この他の予言については、一応経済摩擦の激化や、あるいは自衛隊の軍隊化といったような予言についてもすべて的中しています。同じように、『滅亡の日』が書かれた段階では、

まだソビエト連邦の崩壊というものはだれも考えなかったことですが、これは実際ね、予言した年数より十年早く来たわけだけでも、ソビエト連邦の崩壊、東西ドイツの統合といったようなダイナミックな予言がなされ、そのほとんどは的中しています。

これらは、もともとある段階に瞑想ステージが達すると未来の情景を見ることが出来るということが一つあり、もう一つは、より高度な直観的なデータの読み取りにより、未来の現象というものを理解できるようになるからです。そしてわたしは、無謀にも、またこれから先何が起きるのかについて、皆さんにお話を今日もしたいと考えています。

その前に、まずわたしたちが考えなければならないことがあります。それは、今まで世界の歴史を見る限りにおいて、科学的に研究されたもの、例えばそれは原爆にしろ、あるいは生物兵器にしろ、あるいは化学兵器つまりケミカルな兵器にしろ、すべて使用されてきたということです。そしてこれらを使う背景は、必ず民族間のトラブルであったということをわたしたちは見逃すわけにはいきません。

この民族間のトラブルとはどういうことかという、例えば東西ドイツが統合された今、あるいはロシアがロシア一国になった今、つまり戦争を行なうための能力および国民的な資質、これらが一つ一つ確定されている今、次に何をこの世界を動かしている人たちが考えているのかと考えた場合、それは当然、第二次世界大戦から第三次世界大戦が起きるまでの間に開発されたあらゆる化学兵器の実験および行使が行なわれると見るべきである、ということです。

それはなぜかという、例えば第二次世界大戦においても、公称だけでもロシアで約二千万人の人が戦死していますし、日本においても数百万の人が戦死しています。世界を合わせるならば、相当の人口が減ったということができるでしょう。

しかし人間の、つまり男と女の交わりによってできる子供の数と、それから死んでいく数を計算した場合、今増大傾向にあると。これらの増大した人口は、一回の実験的戦争によって減るんだと。そしてそれはまた再生を続けることにより、それと同等のあるいはそれ以上の人口を形成することが出来るという過去の歴史を見

るならば、この世界を動かしている一部の人たちにとっての思考から考えると、戦争というものは大したものではない、ということがいえると思います。

しかし、その大したことのない死のパートに属するのが自分であるか、あるいは自分の友人や知人あるいは親族であるのかどうかを考えた場合、もしその実験的な戦争のために死ななければならない立場に自分自身が身を置くとするならば、それはちよつと考えなければならぬことでしょう。

わたしは、戦争賛成論者でもなければ、戦争反対論者でもありません。それはカルマの流れというものがあり、つまり多くの人たちの意思の力によって動かされる現象に対しては、それをいくら反対したとしても、それは何の力にもならないということをよく知っているからです。

そうではなく、そのような現象が起きたときどのようにして生きることが最も賢いのか、そして最も自分自身の被害が少なく、あるいは自分と縁の深い者が被害が少なく生きることができるといふことの方に興味があります。この興味の対象は、わたしにより深い多くの教えの理解、そして実践を今まで促してきました。

例えばキリスト教的な教え、あるいは仏教的な教え、あるいはヒンドゥー教的な教えと、あるいは中国のタオイズムと。これらの教えは共通して一つのことを指しています。それはこの世、つまり人生は無常であると。そしてこの無常である人生から解放され、瞑想修行に没頭することにより、多くの超越的な状態を経験できるんだと。そしてそれは、これから未来において起きるであろういろいろな現象においても、多くのわたしたちにメリットを与えてくれるということをわたし自身経験し、そしてこれは科学的にもデータとしてはっきり出ていることです。

例えば一つの例を挙げましょう。瞑想を達成する場合、四つの一般的には経験をし、その後心は静止、つまり寂靜の状態を経験します。

その一つは、肉体的なエネルギーの上昇の経験。第二は光そのものを絶えず見続け、発するという状態。第三は自分の身体と違う別の身体に意識を移し変えることのできる状態。第四は意識が連続している状態、の四つです。

特にこの「意識の連続」については、わたしたちにとって大変有効な効果を与えてくれます。それは何かというと、この意識の連続はわたしたちが死後ショックにおいてもそれに対して影響を受けることなく、そして意識の連続により「中間状態」と呼ばれるバルドーを通過し、そしてその次の転生をこの現世の意識を持ち続けながら経験し続けることができるというメリットです。そしてこの状態を、仏典においては「死の軍勢を撃ち破った」と表現し、あるいはキリスト教においては永遠の生命を得たと表現しています。

これらは、科学的に次のような結果を示します。まず、意識のある状態での呼吸停止の実験、これが達成できる。次に脳波においては、感情の乱れのあるガンマ波、あるいは通常人のベータ波、あるいは潜在意識と表層意識の中間状態にあるアルファ波ではなく、それよりも一つ深い意識状態であるシータ波が、根本的というか通常の脳波の状態である、この状態を経験し続けることができる。

次に例えば外的刺激についても、多くの外的刺激に対して、それに伴う心拍数の増大やあるいは発汗の増大といったような生理的機能が遮断される、つまり外的感覚が遮断されるといったような状態が形成されます。また温度その他についても大変強くなり、だいたい五〇度前後のお湯の中に十五分くらい浸かったとしても、それに対して平気でいられるような、つまりやけどをしないような肉体が形成されてくると。

もちろん、これらの実験を続けるならば、これらの実験を観察するならば、わたしたちは次の点について回答を得ることができます。それは、多くのこれから起きるであろう問題に対して、例えば生理的に、あるいは機能的に変化の起きないような自分自身を形成することができるのだということができるのだということです。では、これから未来に対してどのような現象が起きるかについて、ミカエル・ノストラダムスの詩を引用しながら、そしてわたし自身の瞑想経験から出てくる経験をもとに、皆さんに少しお話をしたいと思います。

まず、この九三年、九四年、九五年、つまり来年から日本はよりいっそう軍事体制が強化されるであろうと。そして天皇は、今の象徴的な天皇から「元首」としてはつきりとした形で表わされるはずであると。これについては、九月に「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」、つまりロシアから放送されているオウム真理教放送の中で、わたしはその内容をお話ししたわけですが、それに対して実際問題として十月、NHKが、中国

に天皇が行ったときに、それに対して「元首」という言葉を使い、それを『朝日新聞』が叩いているという実態があります。つまり、元首化されていっている。

では経済はどうかというと、今の不況より、よりいっそう不景気になる。そして軍需産業を増大させない限り、経済の再興は不可能な状態を各国が形成します。そしてそれによって大戦、大きな戦いが起きるのです。

しかし、その前に日本は大きないくつかの洗礼を受けなければなりません。それは皆さんにとっても精神的、あるいは肉体的に大変苦痛なものになるに違いありません。これらを経験した後、一九九八年の前半から一九九九年にかけて世界的な戦いが生じる。

そしてその後は、その戦いの結果として平和な世界が形成されるというのが予言詩の内容です。しかしここで生き残る人たちが果たしてどれほどいるか。わたしは、文明国については人口の約十分の一くらいかなと考えています。

皆さんが、今日のわたしのね、話を聞き、それによって人生の指針を少しでも変えることができるならば幸いです。

第二十七話 (一九九二年十二月二十三日 京都大学)

人間の寿命と心の働きには、大きな関係が存在します。例えば一般的に病理学的にいわれていることは、精神分裂病の人の寿命は大変短いと。これは、一つのわたしたちに示唆を与えます。それは、もともとわたしたちの有する寿命というものは本来は不死であり、そしてそこへ到達するための道が存在すること。このような話をいきなり皆さんにしたとしても、皆さんはなかなか納得できないかもしれません。というのは、現代医学の力を結集したとしても、例えばわたしたちの寿命というものは八十歳、あるいはせいぜいが百数十歳で止まってしまうからです。

これに対して仏典では、一つのわたしたちに示唆を与えています。それはわたしたちがいろいろな心のけがれ、例えば生き物を殺すとか、盗みを働くとか、あるいは嘘をつくとかいったようなけがれによってわたしたちの寿命は短くなり、そしてそれらの行為・言葉・心の働きが停止したときに、わたしたちの寿命は逆転し、増大するんだという教えです。

ところで、ここにいる皆さんはそういう意味においては大変幸せな存在であるということができるといえます。なぜならば、二〇〇〇年前後を境として、この逆転現象が起きると、これは仏典にもそうですし、あるいは聖書の予言、あるいはノストラダムスの予言にも説かれているからです。

つまり、もし煩惱を有し、そしてその煩惱を満足させながら長く生きたいという人にとっては、これから先の未来は決して明るいものではないが、もし生き方をしっかりと改め、ここでいう改めるとは、自分の中でしっかり検討し、そして自分の納得できる生き方を行なおうとする者にとって、これからの未来というものは大変明るい時代であるということができるといえます。

その第一番目は、アメリカ帝国の崩壊というダイナミックな予言をここでまずしたいと思います。アメリカの力が弱るのが、一九九八年の前半から弱ると。そして今のプラエトル、つまり宗教性のない最高権威の座からずれ落ちると予言されています。これらの予言を信じるにしろ信じないにしろ、少なくとも今の日本の状況

を見れば、わたしたちの周りが大変激しく変化し、そしてそれに注意を向けることこそ最も価値のあることであると考えている方々もこの中に多くおられるはずです。わたしもその中の一人です。

わたしは一九八〇年代にいくつかの予言を残し、それは一九九〇年代にそのほとんどが成就しています。例えば東西ドイツの統合やロシアの崩壊、あるいは日米摩擦の、経済摩擦の激化、そして日本の自衛隊の、自衛隊から要するに軍国、つまり軍隊への移行、つまり出兵を行なうということ、それから選挙においては自民党の大勝大敗が繰り返されるといったような予言です。その予言のすべてをここでお話したとしても、あまり皆さんに意味がありませんので、ここではそういう前提をもとに、これからの話を聴いていただきたいと思えます。

いかなる時代が到来しようとも、本質的にわたしたちのこの肉体には、あるいは感覚器官には、あるいはイメージには、あるいはわたしたちの経験の一つ一つをデータと残している、まあ仏教では「経験の構成」とよばれているものには、あるいは識別には、内なる喜び・内なる自由・内なる歓喜といったようなものが存在します。これは外的な世界と関係なく、内側において、つまり条件なしに成立する絶対の自由であり、絶対の幸福であり、絶対の歓喜です。

例えば例を挙げるならば、わたしたちが性的な喜びを満足させる場合、その絶対の喜びに移行するはずのエネルギーの一部を漏らすかたちでその喜びを経験します。あるいは、例えばわたしたちが何らかの味覚を満足させる場合、同じようにその舌にある感覚器官を使って、その味覚の喜びというものを経験し、それによってエネルギーを漏らします。

しかし、もしこのエネルギーで内なる循環を行なうことができるならば、そのときは絶えず歓喜の状態、あるいは喜びの状態、あるいは至福の状態を経験することができます。

これに対して徹底的なアプローチを行なったのが中国のタオイズムであり、そしてヨーガにおけるクンダリー・ヨーガです。しかし、今から約二千五百年以上前に登場したサキャ神賢、日本では仏陀とかあるいは釈迦牟尼とかいわれている偉大な聖者は、この状態をも常ではない、無常であると説きます。

なぜならばわたしたちがその喜びに没入したとき、その没入した心の働きによってエネルギーの消滅が起きるからです。そして最終的には、その内なる喜びをも放棄した状態、この状態こそが不死であると、あるいはこの状態こそがニルヴァーナであると説くのです。

確かに、これを放棄したときの状態は寂靜、つまり大変静かというよりもスッキリした意識の状態が形成されます。そしてこの状態である限り、眠りもなく、あるいは疲労もなく、あるいは苦しみもない、いつさいが完全に解放された状態になることはわたしの経験からいっても疑いありません。

しかし、これらの段階はあくまでも低い段階であるということが出来ます。なぜならば例えばある聖者が、ただ一人この状態に到達したとしても、それはあまり利益にならないからです。

つまり多くの人が存在し、その多くの人にまず内側に喜びがあることを伝え、そしてその喜びの期限、例えば何十万年とか、あるいは何十億年とかいう長きにわたる喜びを経験したとしてもそれはまた無常であること、そしてそれを放棄したときこそ本当の自由・幸福・歓喜があるんだという教えをもし伝えることができるならば、それは大変利益のある人生であるといわざるを得ません。そしてこれをボーディサットヴァ、日本では菩薩とよんでいます。

これらの菩薩の企てにより、あるいは真理勝者方の企てにより、この人間の世界は形成されています。そしてこれを、例えばゾロアスター教的な表現を使うならば、善神であるアフラ・マズダと、悪神であるアフリマンの戦いと、あるいはアングリマインユの戦いと。

で、このなぜ戦いが起きなきゃならないかについては言及されていないと。これに対して大乘仏典では、多くの示唆をわたしたちに与えます。この人間の世界が形成されたのは、偉大なボーディサットヴァ、あるいは真理勝者方の意向によってであると。そしてそれは、魂を成熟させるためであると。そして魂を成熟させることにより、先程述べた絶対的な自由・幸福・歓喜を与え、それをも放棄する最後のステージに一人でも多くの魂を導くためであると。

そしてこれから起きる、二〇〇〇年にわたって起きる大いなる現象から見ると、破局、これもわたした

ちに多くの利益を与えるはずで。使われる兵器の種類、それはまあ今開発されている原爆やあるいは中性子爆弾だけではなく、生物兵器あるいは化学兵器のすべてが使われることが予言されています。

そして、かくいうわたしもそれを防御するために、まあ約一千億円ぐらいのプラントを今考えています。まあこれは水大都市だけでもね。まあ今の政府がそれを認めるか認めないかは別にして。というのは、この後に起きる世の中の実態というものは、仏典や聖書を読む限りにおいては要するに正しい生き方、そして心を清める生き方をする者だけが生き残ると予言されているからです。それによって、最終的には人間の寿命は約十年になると。仏典では八万年となっていますが、聖書には十万年となっています。まあこの、二万歳の違いというものはあまり大きな問題ではないのでここでは取り上げませんが。

そしてそのターニングポイントに、わたしたちが今生きていられることは、大変な喜びであるということが出来るでしょう。

しかし、もしわたしたちが、そのような現象を無視できるような最終のステージへ到達したならばどうだろうか。この場合、全く外的な変化というものは影響を与えることをしません。そして、その外的状況における変化があったとしても、その影響を受けないための瞑想法をね、今日は皆さんにこの後伝授したいと考えています。もちろんこれには修習の時間が必要であり、皆さんが例えば一日一時間、あるいは二時間、三時間といった時間をそれに費やされ、そしてそれによって心を成熟させられることこそが、そのような状態に至るためのただ一つの方法であると考えられるからです。

ところで、その瞑想法については別にして、皆さんがこのどちらかの道、つまり普通の生活をしながらその生活の中で自分自身を改める、そしてそれによってより高い世界とのきずなができる生き方をするか、あるいはそれらのきずなをも超越し、そして覚者、つまり完全なる解放の意識の状態を経験するか、この二つをこれから吟味なさることは、皆さんにとって最も大きな利益であるとわたしは考えます。

前回この京大での講話は、少しレベルの高い形状界、それから四つの静慮、つまり瞑想の段階について説明しましたが、それについて今年いくつかの科学的実験における証明がなされたので、少しお話をしたいと

思います。

まず成就者と非成就者の酸素消費における違いは、完全なる危険値に突入したとしても、成就者においては危険な状態にはならないと。例えば酸素濃度一二パーセントとかの状態に突入したとしても、危険な状態にはならないという一つの実験データがあります。

それから脳波については、ステージが上がれば上がるほど平坦な脳波になり、要するにシータ波優位の脳波になるという実験データが出ています。

それから外的刺激においても同じように、その外的刺激に対する心臓の反応、あるいは発汗の状態というのは、普通の人に比べるとほとんど反応しないというデータが出ています。

これらのことは、わたしたちが窮地に追い込まれたとき、わたしたちの生命を維持する機能というものは要するに瞑想ステージが高ければ高いほどその生命維持機能は強いんだということを意味しています。

現代は、まさに世紀末である。この世紀末という意味は、一九九〇年代を迎えたという意味ではない。例えば、ノストラダムスの予言詩の中にこのような詩がある。それは司法官が乱れ、そして宗教家が乱れると。この司法官が乱れとは、例えば裁判が正、あるいは邪というものの判定を正しくできなくなり、世の中に迎合し、そして力の強いものに巻かれる時代、それと同時に宗教が本来持っている、宗教の特性である人々を真に苦悩から解放するという役割を果たさないという意味である。まさに現代はその時代である。そしてこれは、今がその時代であり、そしてその成就是何を意味するかというと、わたしたちの近い未来において大いなる裁きが訪れることを予言している。

この松本支部道場は、初めはこの道場の約三倍ぐらいの大きさの道場ができる予定であった。しかし、地主、それから絡んだ不動産会社、そして裁判所、これらが一連托生となり、平気で嘘をつき、そしてそれによって今の道場の大きさとなったと。また水についても同じで、松本市はこの松本支部道場に、上水道、つまり飲み水を引くことを許さず、また下水道においても社会的圧力に負け、何とか下水道を設置することは目をつむったわけだが、実際問題として普通の状態です可したわけではない。

しかし、これらの現象は、別の見方をすれば大変ありたいことといわざるを得ない。それはなぜかというと、例えばある化学変化を起こす場合、その化学変化を起こす場合には二つの条件が必要となる。一つは熱であり、一つは圧力である。また外的条件においては、触媒というものが必要となると。この三つをそれぞれ検討した場合、まず触媒はグル、あるいは真理の教えというものがそれを果たし、そして熱はその中で生活している、つまり真理を実践している人たちが大いに功德を積むこと、そして外的圧力とは、いうまでもなく社会の理不尽な圧力であると。

これらの圧力・熱・触媒という三つの力によって、普通では考えられないような化学変化が起き、新しい物質が生成される。まさにこれはわたしたちが、このけがれた人間社会から出離し、脱出し、解脱し悟るための

プロセスであるといわざるを得ない。

そのような意味において、この社会的な圧力というものは、修行者の目から見ると大変ありたいものであるといえることができる。

しかし、これは修行者側から見た内容であって、これがもし逆にその圧力を加えている側から見た場合、どのような現象になるのかを考えると、わたしは恐怖のために身のすくむ思いである。

わたしはこのような予言を九二年に行なった。それは、神々の怒りが増すであろうということが一つと、そしてもう一つは宗教間の戦いが激しくなると。そのバックは、つまりその戦いを挑ませているものは何かというと、キリスト教、別の言い方をすればフリーメーソンによるユダヤ教であると。

一九九二年の何といっても大きな現象の一つは大津波であると。この大津波で約千五百人ぐらいの人が行方不明になり、そしてそれによってマグニチュードも、史上最大といわれる数字を出したと聞いている。この他インドにおいては、ヒンドゥー教とイスラム教の対決により、千人以上の人が死んで多くの逮捕者が出たと。これはまさに予言の成就といわざるを得ない。

また、オウム真理教の世界に発している「エウアングリオン・テス・パシレイアス」、つまり御国の福音の反応も徐々に大きくなり、すでに世界から五百通以上の人の感想の手紙が教団に寄せられている。そして、世界五十カ国以上の人が、このオウム真理教の世界放送、御国の福音を聞いていることが証明されている。これはすべて予言の成就である。

ところでイエス・キリストは、予言どおり登場し、そして予言どおり十字架に架けられ、その役割を果たし逝った。また、サキヤ神賢の時代、サキヤ神賢は周りの疑念と闘いながら、そして晩年は王を超える王としてインドに君臨し、法則を説き明かし、そして役割を果たし逝った。また、マホメットは、自分の神からの啓示を受け、そしてそれとともにいったん宗教的戦いに破れ、そして聖戦により、今では世界の約三分の一の信徒を獲得している大教団を形成している。彼らはすべて、予言に述べられた、予言上登場しなければならない人物である。

では、オウム真理教の役割とはいったい何か。それは、この地球のすべての魂を救済することが予言されている教団である。したがって、キリスト教に述べられている予言、ノストラダムスに述べられている予言、あるいは仏教に述べられている予言、これらを一つ一つ確実に成就させていっている。政治、司法、マスコミという三つの圧力に対してじつと耐えながら、先程述べたとおり個々の内なる変化を誘発させつつ、オウム真理教は少しずつ世紀末、つまり二〇〇〇年に向けて進んでいるわけである。

そのような意味において、この松本支部道場の建設の完成は、わたしたちに大きな一つの証明を与えてくれたことができる。それは、いかに圧力が加わろうとも真理の教えは最後には勝つと。そして、この真理の殿堂が、真理の伝道、つまり伝え宣べるための準備を確実に行ない、この殿堂から多くの真理の法則が発せられ、そして、それにより多くの松本の人、あるいは多くの長野県の人たちが救済される。

当然、法則のスタートは苦難に満ちなければならない。それは、この世の中がマアラ、つまり悪魔の支配に完全に侵されているからである。そして、わたしたちは着実に一歩一歩、真理の足跡をこの地球に刻み続けている。これらの法則の普及は、九三年の後半、特に十月以降急激に新しい変化をもたらすはずである。それは、オウム真理教の大いなる発展ということができる。

わたしは数々の予言をした。これは、教団についてもそうである。そして、例えばすでにオーケストラ——このオーケストラというのは今のNHK交響楽団とね、同じぐらいのレベルのものがすでにロシアにでき上がり、これは三月から公演がスタートするわけだが——この具足。それから先程述べたラジオにおける世界放送の具足。それから日本向け放送についても、今まで七二〇キロヘルツで入りづらかったものが、一四七六キロヘルツで、しかも、中波のね、三時間連続で一月一日からスタートすると。そして、ロシア国内においては三十分間の毎週のテレビ放送、および二億二千万人に対する一日五十分のラジオ放送と。

そして、これらの具足は次にわたしたちに大きな予言の成就を約束させている。それは、最終的にはこの地球そのものが、真理の実践を土台とした大いなる光り輝く生命を有する国に変わるということである。そして、その予言の成就のために、わたしたちは全力を尽くさなければならない。そのターニングポイントは一九九三

年十月ということになる。

つまり、この一九九三年十月以降オウム真理教の教団そのものが、これは信徒数および質を含めて飛躍的に発展するであろう。それは、今の例えば十倍とか二十倍とかいわれるような数字ではなく、劇的な変化を遂げるはずである。

しかし、その変化を遂げる前に、わたしたちはそれらの人々を導く準備をする必要がある。それは、わたしたちは大きな功徳を積み、奉仕をし、戒を守り、忍辱の具足をし、そして自分自身の善法の増大と悪法の捨断・教学・瞑想・サマディ・智慧への到達・悟り、そして解脱である。これらをしっかりと具足し、そして、一人一人に対して真剣に真理の法則の流布を行なうならば間違いないこの予言も成就し、地球そのものが、わたしたちがまだ生きている間に、いやもつと早い時期に真理の惑星へと変わるはずである。

その大きなきっかけの一つとして、この松本支部道場が活用されることを祈りたいと思う。

今日は、今までなした予言の成就について、そしてこれからの世界の流れについて、それから信徒は何をどのように実践すればいいかという点について話をしたいと思う。

まず君たちも知つてのとおり、わたしは「今年の三月、経済が復興したかのように見える」と、つまり、株価は上昇し出すと予言した。現実の問題として、原因不明の株価の高騰、つまり値段の上昇が始まっている。ではいったいこれは何なのか。これは、貪り多き魂にカルマ落としをするという、フリーメーソンの一つの仕掛けである。では、どのような仕掛けであろうかと。株価が上昇する。そうすると、貪りの強い人はこう考える。「今ここで一つ儲けておけば楽である。何とか挽回できる」と考える。すると、一方では借金をしながら、一方では余剰のお金を株に突っ込む。この株に突っ込まれたお金により、よりいっそう株価は上昇すると。しかし、その株式に投資されたお金が一気に引き上げられたときにその株価は下落すると。このときに、前回のバブルの崩壊と同じように、何百兆円というお金が日本からまた消えるはずである。そして、そのダメージは、前回のバブル崩壊以上にわたしたちに大きなショックを与えることとなる。

しかし、これは理の当然である。なぜならば、今から二千年前に登場したイエス・キリストを迫害したユダヤ人は、そのカルマによって五十年内外のうちに国外に追われ、そして流浪の旅へと至った。今の日本は、わたしをはじめとする偉大な達成者たちに対して、ものすごく大きな迫害をなした。このカルマは当然、日本経済の衰退、そしてそれだけではなく大きなカルマ落としをこれから受けなければならない。なぜならば、二千年前に登場したキリストと、それから今登場しているキリストとは、そのカルマの大きさ、それから役割が全く違うからである。つまり、ちょうど天に唾を吐いたような現象が起きるはずである。

そして、わたしの研究はいよいよノストラダムスについても最後を迎えてきている。それによると、九七年ハルマゲドンであると——これは、まだわたし自身がその詩を検討しているわけではないから、不確定な要素が含まれているということを土台として聞いてほしい。今ノストラダムスについては、ヴィマラ君を中心とし、

そしてそれをわたしがチェックして、もう一度詩の原義とそれから瞑想とに合わせて修正するというパターンを採っている。したがって、この訳はわたしが干渉していない段階での訳、その訳によると——九七年、間違はなくハルマゲドンが起きるであろう。これは単純な理論で、詩の九十七番にそれがあるからだということだね。つまりノストラダムスは、二期に分けて予言詩を展開していると。五章までの詩は、年代順に並んでいる。五章以降の詩は、年代順ではなくて、いろいろなキーワードを基に解かなければその順番がわからないという構成になっている。これは今まで、九〇、九一、九二、九三とずっと追っかけていてね、ま、その結果が出たわけだけれども。したがって、記憶が間違っていなければ三章の九十七にこのハルマゲドンの予言詩があると。したがって、この人類の総人口が三分の一、あるいは二分の一、あるいは少なければ四分の一となるときは間もないであろうと、つまり数年以内であろうとわたしは予言する。

九七年にハルマゲドンがあったら、じゃあ何が次は起きるんだと。一般的には、ハルマゲドンイコール最終戦争という考え方を持つ。しかし実際そうではない。ハルマゲドンは、あくまでも「ハルマゲドン」と呼ばれるエリアでの戦いである。しかもそれは、世界大戦の様相は秘めているが、まだそのときにはアメリカ、あるいはイギリス、フランスといった国々に力が残されていることは間違いないし、このときにまだ世界が認めるキリストは登場しない。

では、世界が認めるキリストはいつ登場するのかという問題になると。これは、最終的に二〇〇〇年であろうと考えられる。ではその九七年の戦いには、キリストは参加しないのか。これは、予言詩では参加することになっている。そしてその後、イギリスが叩かれ、そしてアメリカが叩かれる。これが予言詩の全容である。

では、それに対して、わたしたちはどうのような準備をする必要があるのか。これには、二つのカテゴリーに分ける必要がある。

まず第一番目は経済対策である。まずできるだけ銀行に預けないと、お金は。なぜならば、これからバブルがもう一回はじけた段階で、銀行はよりいっそう窮地に追い込まれることとなる。その段階で、例えば銀行の

閉鎖、あるいは統合等が行なわれるはずである。そのときあなた方が預けているお金がそこから引き出せるかどうかは、これはブラジルの例を見てみればよくわかるはずである。

それから第二のポイントは、倒産が相次ぎ生活がでなくなる場合、その仕事を確保する必要がある。これについては、ま、オウム真理教も今、「マハーポーシャ」をはじめとして一生懸命受け入れ態勢をとろうとはしているが、なにせわたし一人で、まあ、そうだね、教団を動かし、それからマハーポーシャも動かしているような状況であるから、発展性にまだ乏しい。とはいっても、今マハーポーシャはすでに月間の売り上げが一億円を突破し、おそらく売り上げ台数としては個人ユーザーに対しては業界ナンバーワンになったのではないかと。これはわずか三ヶ月経たない間に。これはもちろん、ナンデイヤや、メッタジ、あるいはその他のね、正大師・正悟師等の協力があるから、このような結果になっているわけだけれども。しかし、DOS/Vのこれからの先行きというものはあまり芳しくないだろうから、まあせいぜいが年間三十億円ぐらいの企業に納まるんじゃないかと。DOS/Vだけだね。だからこの他に、事業としてしっかりやっていけるような、そういうデータがもし君たちの中であつたら、それは提供してほしいと思います。検討します。

まあいずれにしろ貪りを捨断すれば、この日本で生きること、それはさして難しくない。例えば例を挙げると、だいたいDOS/Vの利益率というものは、一般企業においては六〇パーセントから七〇パーセント、つまり仕入れ値の二倍から二・二倍ぐらいの値段をつけて売っていると。マハーポーシャの場合だいたい、そうだね、二五パーセントぐらいの利益しか乗っけていない。

この違いは何かという、要するに従業員、つまり、信徒に給与が出せればいいというものを根本としてつくり上げた会社がマハーポーシャであるから、ここであまり利益を出す必要はない。と、そこで当然、いくら安売りをしているところがあつたとしても、もともとの思想が違うから、値段の差は歴然として出てくると。それで、例えば今最も安いといわれている君たちはあんまり知らないかもしれないが「STEP」等と比較しても、そうだね、だいたい、三パーセントとか五パーセントぐらいの安さで一般の人たちに提供できると。

そして、オウム真理教の信徒は非常に質が高いから、機械の性能の面についても、それからアドバイスの面

についても、しっかりとしたもののが提供できると。当然これは他の企業が勝てるわけがない。そして同じ発想で、同じ思想によって、もし他の企業を立ち上げるならば、今の日本において負ける企業はないだろう。そして、これがわたしの信徒の失業対策であると。

では信徒自体は何をどう考えたらいいのか。これは、「カルマ」というものについても一度検討する必要がある。

例えば、ある、一年三ヶ月だけ一生懸命やった信徒がいた。この信徒は一年半、「わたしは教学システムの特別の入門を終わらせてしまいました」と。しかし今の現象が納得できない。それに対するわたしのコメント、つまり「カルマの解放というものは、そんなに甘いものじゃないんだよ」と、「時間がかかって解放されるんだ」ということに対して納得できず、その信徒は退会した。これらは明らかに無智を根本としているし、それからその指導にあつた師あるいは正師がしっかりと法則を説いていなかったことに原因は由来すると。

つまり何をいいたいかというと、例えば例を挙げよう。ここにガンがあつたとして、そのガンが果たして一年、あるいは一年数ヶ月の入信という形をとった段階で消えるかどうかという問題である。もちろん、真に信を持ち、そして修行するならば、二ヶ月、あるいは三ヶ月ぐらいでガンは完全に消えてしまうはずである。

しかし、信がなかったからこそ今まで真理と巡り合えなかったわけだし、例えば信がなかったからこそ外道の修行をしていたわけである。この点を考えるならば、自分自身が形成している五つの構成要素、つまり、この肉体、それから感覚、イメージ、それから経験の構成、それから識別という、この五つのカテゴリーについて、そんなに簡単に浄化できないということはわかるはずである。

つまり何を言いたいかというと、自分自身が今まで積み上げてきたカルマ、これは善業にしろそうだし、悪業にしろそうだし、それをしっかりと絶えず数える必要がある。そして、例えば「オウム真理教の信徒」という名ばかりではなく、しっかりと六つの極限、徹底した六つの極限の実践を行なうことにより死の準備を始めるべきだというのがわたしのアドバイスだ。

なぜならば、例えばわたしの予言が外れ、九七年、あるいは二〇〇六年にハルマゲドンが起きなかったとし

て、その、起きようが起きまいがわたしは死ぬんだという前提があると。つまり死刑執行が、十年間、二十年間、あるいは三十年間延びたにすぎないと。この状況を考えるならば、「死」という命題に対して、わたしたちが徹底的に検討し、そしてその準備を行ない、そしてこのけがれた肉体を捨て、高い神々の世界に至るこの法則の実践は決して不利益にならないということを言いたいのである。

インスタントラーメンは、今一分、あるいは三分でできると。ところがラーメン屋さんのラーメンは、そのめんを練るところから、ゆで、そして食べるまでの時間を考えたものすごい時間がかかる。実際ラーメン屋に行っても、それは時間がかかるはずである。そして当然、インスタントラーメンが、本当に心を込めて作ったラーメン屋さんのラーメンに勝てるはずはない。

これは何を言いたいかというと、これと同じで、教えも同じである。その教えを表層的にサラッとさらった人と、それから、日々修習し、そして五つの構成要素すべてが神々に至る、そのように思念しながら実践している人とは、一時間、一年、そして十年と経つうちに、全く別の五つの構成要素へと変化するんだということとを認識すべきだとわたしは言いたいのである。

まだ新しい人は、わたしが過去においてなした予言についての的中率を見ればいい。特に、今回のこの三月の経済問題については、身近な予言として予言してある。そしてわたしは例えば、日本人全体に対して、フジテレビの「おはようナイスデイ」を通して宗教界の予測をした。これはおとしの問題ね。そして去年はそのとおり現象が動き、そして去年、わたしはまた同じように九三年の予言をした。それもおそらくそのとおり動くであろう。

ではなぜ予言はそのとおり動くのか。それは、「証智」という段階がある。この証智とは何かというと、わたしたちの経験の構成をしつかりと視覚的に見、そして耳で聞き、鼻でかぎ、舌で味わう。そして触覚で感じ、意識によってそれをとらえる。一般的にはこれを五感で行なうわけだが、内なる五感が存在し、その五感によって、目の前にいる人だけではなく、社会の現象を見るならば、それは自ずと未来にどのようなカルマが現象化するかというものはわかるのである。

これはわたしだけの力ではなく、君たちの奥深くに潜んでいる力であることはいうまでもない。つまりそのような意味においては、わたしも君たちも変わらないということになる。ただわたしの方が少し今生、先に修行し、そして少しだけ努力した。その結果として、君たちと違ったかのような力が備わっていると。しかしそれは、先程も述べたとおり、君たち自体の力でもあるんだ。そして君たち自体がそこまで到達する努力をするならば、君たちは必ずや、苦しみなき、しっかりとした未来を見通す力を得、そして正しい輪廻転生、最終的には輪廻からの脱却ができるはずである。

もともと輪廻からの脱却というのは、これはマハーヤーナ仏教において特に説かれていることだが、この三界、つまり欲界・形状界・非形状界を自在に行き来する力、ということになっている。つまり解脱、ニルヴァーナ、イコール完全なる静止ではなく、静止した後、自在に救済者としてこの三界を行き来できるんだということとを認識した場合、その自由の違い——例えば一般の人は、この欲界に固定されているわけだが、その自由の違いについてよく認識できるはずである。

わたしたちが肯定しようとする死。ハルマゲドンが起きようと起きまいと死ぬ。この命題は変わらない。したがって、この命題を真剣に受け止め、そして真剣に実践する魂こそ、本当の智者であり、そして本当の賢者であるとわたしは言いたい。そして今生、あなた方がいつのときか最終地点に到達するならば、そのときあなた方には、生死を超えた安らぎ・歓喜・自由の三つが備わるはずである。そしてそれこそがアラハットの状態である。したがって、しっかりと今日ね、わたしの話した内容、特に「九七年ハルマゲドン」を信じて、全力で修行してほしい。いいね。

今日の講話は、君たちにヒナヤーナの話をするればいいのか、あるいはマハーヤーナの話をする方がいいのか、あるいはタントラヤーナの話をする方がいいのか、あるいはヴァジラヤーナの話をする方がいいのか、非常にわたしの中で迷っています。というのは、ここに集まった人たちのニーズが、それだけ違うからだ。

何を話したらいいか？

(一同)……。

まあこの違いについて説明をするならば、例えばわたしたちは酸素を見ることはできないが、酸化した形でその現象を見ることはできると。例えば鉄さびなんかはそれに当たるわけだけれども。これはまさに、そうだね、目に見える現象、ヒナヤーナということができるだろう。

そしてこれを、例えば、空气中に酸素が存在するんだということで、まあいろんな実験によりその機能を徹底的に分析し、それを活用すると。これはマハーヤーナということができよう。

あるいは、この酸素の実際問題として核を取り出し、中性子やあるいは陽子の働きにより、より大きなエネルギーを取り出すと。これはヴァジラヤーナということができよう。つまり、一つの現象に対して、見る角度によって法則の説き方は変わってくる。

同じように、例えば個の幸福という点から考えたならば、それは当然、まずヒナヤーナから入るべきだし、あるいはヒナヤーナがある程度の段階に到達したならば、例えばマハーヤーナから入るべきであると。そして、そのマハーヤーナの意味合いが理解できた段階で、ヴァジラヤーナの教えへと移行すると。

例えば例を挙げるならば、「個の解脱」について法則を説く、これは明らかにヒナヤーナである。そして例えば、「今の現象に対して、信徒がどのような社会生活を営んだらいいのか」という法則を説く場合は、これはマハーヤーナということになる。あるいは予言の内容について説き明かす場合、それはヴァジラヤーナということになる。

どうだ？

(一同)……。

どのような話を聞きたいか？ なぜわたしが、今までこういう質問をしないで、今日こういう話をしているかというと、非常に切迫した時期に来ているのは事実であると。そして、どの法則を説いたとしてもあなた方に利益があると。しかし、わたしがあなた方と接する時間は限られている。よって質問をしているんだ。

(信徒) ヴァジラヤーナ。

ヴァジラヤーナの道か、よし。ヴァジラヤーナの話でいいんだな。

(信徒) ……はい。

非常に少ないけれども。

君たちは知つてのとおり、今までわたしが数々予言したことの中で、まだ外している予言というのは、一ドル一〇〇円。しかしこれももう間もなく、——今一ドル一五円か？ だから、当然達成されるだろう。そうなった場合、わたしが予言したオウム真理教パッシングを含めてそうだが、すべてが現象化したことになる。もしそうだとする場合、この世界に、この地球に、これだけの予言をなし、的中させた魂がいると思うか？

つまり、君たちが今、実際問題として、目の前にしている魂というのは、この二十世紀の終わりに最も重要な役割を果たす魂であると考えたらよろしい。そして、偉大なる予言者ノストラダムスは、わたしにその予言の解説を託したと。

もともと、ノストラダムスの予言というのは、五章までと、それから六章以降との組み合わせ、つまり時代の流れというものはかなり違っている。これはノストラダムスが賢くて、「年代順にすべてをした場合だれでもわかる。しかし、もし前半と後半の年代の並び換えを行なうならば、それは一般の人には『必ず同じ詩の系統で流れているはずである』という原則によって見誤るだろう」と考えたからである。そしてこの、一章から五章までは間違いなく年代順に並んでいる。特に、この一九九〇年代は、一の九〇、二の九〇、三の九〇という形で並び、九一においても同じ、九二においても同じと。そして九三について今確認をしているが、これ

も間違いないと。とするならば、これから二〇〇〇年までの現象についてはノストラダムスの一の九〇から、二の九〇から、三の九〇から、四の九〇から、そして五の九〇からを見れば、おおよそのことはわかるということになる。

そして、ノストラダムスは何を説いたのかと。「九七年ハルマゲドン」であると。この「九七年ハルマゲドン」については、まあ、もうしばらく経ってね、『真理』その他によって君たちに少し解説を入れるかもしれない。入れないかもしれない。——この「入れるかもしれない、入れないかもしれない」というのは、わたし個人の運命とどのように絡んでいるかという検討をしなければ、君たちに発表できないということだね。

もともと予言の流れそのものは、オウム真理教とは全く関係がない。これはもともと、わたし個人と関係があることである。したがって、このヴァジラヤーナの流れというのは、オウム真理教の運命とは関係がないと認識してほしい。しかし、ノストラダムスがキリストをわたしとして予言している以上、わたしが世の中の中心に引っ張り出され、そして、そうだね、まあ間もなくして、主役を演じなければならない時代が来ることは間違いないだろう。

ではなぜ、それが起きるのかと。例えば、今の自衛隊を見てみよう。今の自衛隊の兵力は、いや、アジアにおいてはかなりの兵力、あるいはかなりの軍事力を持っているといわれている。しかし、それはあくまでも西側の誤った宣伝、つまり、日本に力を与えないための宣伝である。おそらく戦争になった場合、今の自衛隊はほとんど全滅するだろう。なぜならば核を撃ち込まれ、そして、例えばガス兵器、あるいは生物兵器を撃ち込まれたらもう終わりだからである。

これはいくら個人的肉体を鍛錬したとしても、あるいはいくら、そうだね、マシンガン、あるいは爆薬の訓練をしたとしても、そんなものは何の役にも立たない。一発光れば終わってしまうと。そういう現象、そういう事態がわかっているにかかわらず、今の自衛隊は、自衛隊という名目のもと、海外まで行かされると。

そしてわたしの予想では、今年の終わり、あるいは来年の頭ぐらいに次のような現象が起きる。それはカンボジアで自衛隊員が殺されるということだ。それによって日本人の国民感情は高まり、そして軍国化を余儀な

くされると。しかし日本が核を持つことは許されないと。つまり何を言いたいかというと、人口減らしのため日本人は死ぬということだ。そして、それに対して知らないあなた方は同じように死ななければならぬ。

では、今の為政者はなぜそれをやらないのかと。それは金丸の隠し財産を見てもわかるとおり、ものすごい多額の金流れ、そして、それによって彼らは生きる保障を与えられていると。そして一般の魂は死ななければならぬと。これは第二次世界大戦を見てもわかるはずだ。もともと戦犯の中心である天皇はどうなったかと。彼は今ぬくぬくと生きていると。しかし、何百万という人は死んだんだと。

ところで、これらの政治体制というものは今始まったことではないということを認識する必要がある。ではなぜ認識できるのかと。それは例えば江戸時代にもうたわれているとおり、「庶民というものは殺さぬよう、そして生かさぬよう」と。つまり、そこそこの生活をすればいいんだという発想が為政者の中にはあるからである。これが為政者とそして一般の魂の違いである。しかし、もし個々の魂が霊的に進化し、そして智性を向上させたらどうなるだろうか。その場合のみ、すべての魂が本質的に幸福になる道が現われてくる。

例えばわたしが昨年の中旬に「マハーポーシャ」をつくったと。このマハーポーシャのもともとの狙いは、これから来るであろう経済不況に対する、信徒に対する一つの対策であったと。

つまり、九三年の中盤、後半になると、もともっと経済は悪化します。わたしは八月ぐらいを考えている。この八月ぐらいから徹底した経済悪化が起きるはずである。ではなぜ経済悪化が起きるのかと。それは、日本人は無智であるがゆえに、一回過ちを起こした貪りを、もう一度起こしているからである。

その典型的な例が株価の高騰である。この株価の上昇は、別に景気が回復したから上昇しているわけではない。これはある、お金を有している者たちがわざと投資をし、株価を上昇させていると。そうするとどうなるかというと、貪りの強い魂はそれに対して、今株価が上がっているから、借金は借金として存在しているにかかわらず「投資しよう」と投資すると。そして一気に株価が下がる。この段階で日本の経済からまた何十兆円というお金が消えるはずである。

わたしの見るところ、日本経済を動かしている経済の総額は三千六百兆円ではないかと考えている。そして

その中の、まず第一段階で千二百兆円が抜かれたと。残り二千四百兆円であると。しかしこの二千四百兆円も、これから九三、九四と徐々に、先程言った投資のマジックによって、日本経済は悪化するはずである。

しかし、もし本当に信のある信徒がここにいるとするならば、その信徒は恐るるに足りない。なぜならば、そのときにはそのときの法則を実践すればいいからである。つまり、どのような形になるかというと、この世の中は必ずやデフレ傾向になるであろう。デフレ傾向とは、現金の価値が上がるということである。例えば昨日、わたしはアッサージと少し話をする機会があつて話をしたわけだが、今から一年半前、アルバイトは一万五千円ぐらいのアルバイトね、日給がザラにあつたと。しかし今では、九千八百円の日給のアルバイトが最高であると言つていた。これは何を意味するのかというと、確かに稼ぐ方はカネの価値がなくなったが、もしカネを持つているとするならば、そのカネの価値はあるということである。

ここまではマハーヤーナの内容である。

しかし、先程述べたとおり、もし、日本が戦争に巻き込まれ、そして今のお金というものが全く価値がなくなつたらどうしたらいいんだという問題が出てくる。しかしこれに対する対策はない。特にこの日本を見た場合、ある機械を作るにしろ、ある電気製品を作るにしろ、あるいは食物にしろ、すべて輸入である。第二次世界大戦前は、米、その他の物質は、食糧物資はね、ほとんど国内で賄われている。しかし今はそうではない。ということは何かというと、もしこの日本から、三千六百兆円が例えば千二百兆円になつた段階で、しかも物がなくなつた段階で、いったいどのようにして生きていけるんだらうかという問題について考えなければならぬ。

答えは簡単である。それは、まず、これからの経済をしっかりと見切り、そしてそれに対する準備をすればいいんだと。では何をどうすればいいのかと。それは完全なる生産ラインの確立であると。つまり、原料の輸入を確保するか、あるいは国内で原料が確保できる状態を第一につくると。

実はわたしは、このために、今一つのプロジェクトを組んでいる。これは何かというと、この地上から、つまり大地からすべての元素を取り出すという機械である。しかしこれについては、まだいろいろと大きな問題

があると。原理的にいうならば、プラズマトーチ、プラズマによって完全に一つ一つを原子化すると。そしてそれを質量分析器にかけると。そしてもしこの質量分析器が、キャパシティがね、そのプラズマによって得られた原子、これをしっかりと分類させることができるならば、この大地にはすべての元素が含まれているわけだから、すべての元素を手に入れることができる。

それからもう一つは——これもマハーヤーナに属することだが——まあこの信徒さんの中に、これからまた一カ月後、二カ月後には失業者が増えるだろうと。その場合に、生産工場をできるだけ多く設けて、そしてその生産ラインの中で物を作り、それをダイレクトに販売すると。当然これからの世の中は、いい物で安い物しか売れなくなる。高級品は全く売れなくなるだろう。したがって、いかにいい物を安く作るシステムを持てるかがポイントとなると。

では、そのような世の中がこれから何年続くのかと。わたしは、先程述べた九七年のハルマゲドン以降、かなり長く戦いは続くと考えている。そして、そこで生き残る魂は、この人口の多くて二分の一、少なければ四分の一であると。ではいったい、何ゆえにそれが起きるのかということについて、これから話をしなければならぬ。

まず、君たちも知つてのとおり、八〇年代は、物質的な両軸の対決、これが終焉を迎える時期であつたといふことができる。物質的な両軸とは何かというと、一方は共産主義、一方は資本主義である。そして共産主義の負けという結論が出た。ではこれらのことはなぜ起きたのかと。それは簡単である。つまり、物質的平等という、ある命題に対して、今の人類がどのような形でそれを理解し、そしてどのような形でそれが実行されるのかというテストケース、これがロシアであつたといふことができる。

では次の命題は何かと。次の命題は、フリーメーソンが掲げる自由・平等・博愛というこの三つの命題に対して、果たして人類は自由という選択をするのか、あるいは平等という選択をするのか、という問題である。

なぜ自由であつて平等であつてはいけないんだという質問があるかもしれない。しかし、よくこの問題について考えてみよう。